

学部・学科	保健医療学部看護学科	氏名	岩本淳子
1. 教育の責任			
1. 保健医療学部看護学科のディプロマポリシーを達成し、豊かな人間性と汎用的能力を備え、「人」を中心に備えた主たる教育の責任は、看護実践の基礎的能力を育成することにある。 入職一年目の令和5年度は奈良学園保健医療学部看護学科の教育課程が変更され新旧教育課程の移行期間であった。成人と老年看護学領域の融合による関係性の形成や「成人老年看護学」領域科目の講義・演習の教育内容の選定や教育方法及び留意点について領域教員と協議し、相互の調整を行うとともに、自身が担当する必修科目の指導計画書を作成して講義・演習・実習の準備を進めた。旧課程の科目運営についてはこれまで尽力されてきた科目責任者の教育活動の考えを尊重した。学生の教育の質にかかわる案件については、学生や教員の相談を受け助言指導を行い、重要事項は上位組織への報告連絡相談および連携により課題解決へと繋げた。 2. 成人老年看護学領域の新旧専門科目（必修）と卒業要件にかかわる科目を担当している。成人老年看護学領域の科目は現在の社会情勢や疾病構造などの動向を踏まえ、地域で生活する成人老年や家族に対して予防の段階から看護を実践できる力を強化し、卒業時の看護実践力の向上を見据えて教育することが期待される科目である。特に「成人老年看護学概論」は成人老年看護学領域の筆頭となる科目で、成人期から老年期までを連続線上で捉え、各時期の発達段階や発達課題を踏まえながら今後の科目運営において健康の段階に応じた看護実践ができる基礎的能力を修得できることを意識して講義を行った。令和5年度に担当した科目は、 ・2年次生：「成人老年看護学概論」2単位30時間、「成人老年看護援助論1」（生命維持の破綻から健康回復への支援）2単位60時間（後期）、「成人老年看護援助論2」（障害適応とエンドオブライフへの支援）2単位60時間 ・3年次生：旧課程の「成人看護学実習1」（急性期）3単位135時間 ・4年次生：「卒業研究1・2」「統合看護論」 3. 大学院看護学研究科は、基礎科目である「病態生理学」「フィジカルアセスメント」を担当した。 4. 4年次生2名をアドバイザー学生として卒業研究ゼミの指導や就職活動を支援した。 5. 教務委員会委員長として部会が所管している教務事案（教育課程、履修方法、学生の試験・単位認定、学籍変更、導入教育、卒業研究、共通教育等）を所掌した。また、令和5年度は新旧課程の移行時期において、対象となる学生が科目の読み替えを確認でき、滞りなく履修できるように支援するとともに過年度生の単位取得状況に応じて科目履修で不都合が生じないよう時間割の作成や未修得科目を有する学生の状況を把握した。 6. 看護学科学科長として教員一人ひとりが働きやすい風通しの良い職場環境になるよう調整を図るとともに、各教員との意見交換を通じて教員の能力を信頼することができた。そのため、有事の際には自信が責任を持つ覚悟を決めることができ令和5年度は教員個々の主体的な教育活動を尊重し見守ることができた。			
2. 教育の理念・目的			
教育における教員の役割は、教科内容を学生たちのものにすることと学生が自主的・協働的に学習が展開できる集団に育成していくことであると考え。但し、ここでいう集団とはグループ単位の集団を指している。クラス全体の盛り上がり期待することは難しいので、少なくとも実習グループ単位で相互の学習にかかわり自己管理能力と自己指導力を修得できることを目指していきたい。 ・「人は必要に応じて何歳からでも学習し、成長していける」というのが私の基本的な考えである。学生にはせっかく社会に出ていくからには自分の夢を実現するために長期的な生涯学習をとおして具体的に事故をどのように形成していくかを考えてほしいと願っている。そのために学習はいつでもどこからでも始められるという信念は人の背中を押してくれる原動力となっている。			

3. 教育の方法

1) 学生との接し方：学生個々の「人を支える人になる」という目標の実現を支援するために奈良学園大学では「奈良学園大学コミットメント」が発表されている。学生を主体として関わり、自分の考えを安心して発言、行動するために学生一人ひとりの挑戦を応援すること、学生の相談事に寄り添い、ともに成長する姿勢で関わることをオープンキャンパスや在学生の面談時に公表し実践が伴うように意識して学生に接している。また、何らかの理由で学びの継続に困難が生じた場合には、学生・保証人とアドバイザー教員の面談に参加して、それぞれの立場の方々の多様な考えを伺うとともに学科として支援する可能性を探り支援体制の検討や見直しに繋げている。

2) 授業の工夫

①「入学前スクーリング」に取り組んでいる。学生が大学の4年間で自身の発達段階の特性を知り、モラトリアムの4年間で教員の支援から自立して自主的・協働的に学習を展開できる集団になってくれるよう心理的・社会性の発達を解き自己教育力を育むように支援している。

②成人老年看護学領域の科目を担当する上で大事にしていることは、成人期から老年期までを連続線上で捉え、各時期の発達段階や発達課題を踏まえながら健康段階に応じた看護実践ができる基礎的能力を育むために、予防の段階から健康段階を軸として概論・援助論・援助論演習・実習と段階的学びを勧められるよう科目を配置しているが、本格的な科目の開講に向けて学習内容・教育方法共に教育内容の洗い出しと教育方法を検討している。

3) FD/SD活動等に関わる内外の研修会への参加

入職一年目の令和5年度は学外の研修会へ出向き意見交換をする余裕はほとんどなかった。しかし、学内では教育・研究に関するFD/SD研修会が時事に応じて開催されていた。特に看護基礎教育の教育課程の変更に伴う各領域の教育目標・目標を理解するは切れ目のない教育を行う上で重要かつ緊迫の課題であであった。基礎看護学領域の教育の構成内容や教育方法を聴講し、学生が主体的に、探究的に課題に取り組み、課題発見・課題解決の思考プロセスを2年生・3年生への学習へつなぐためのきっかけをつかむことができた。また、日本私立大学協議会や日本教育学会などのオンラインで研修に参加することができ、これからの看護教育の展望を深く学ぶことができた。

4) 自らの専門分野の成長

文部科学省科学研究費補助金：基盤研究（c）の課題にとりんでいる。今年度は最終年にあたり、データの収集及び解析を始めているが、入院中の高齢者の転倒予防について仮説が検証された場合は、看護実践の場へ研究成果を伝え課題解決のための対策を講じるとともに、日中の光曝露量の減少がサーカディアンリズムの変調やこうレ社の転倒の要因になることを看護教育のエビデンスとして活用する。

4. 教育の成果

入職1年目にして数少ない科目で教育の成果を論じることが難しいが、毎回の授業の振り返りでは「説明がわかりやすい」という評価をもらっている。反面、これだけは理解してほしいという内容の説明では熱弁するため学生から「しつこい」「威圧感を感じる」という評価も出てきている。学生の思考を支配・統制するつもりはないと弁明している。中には「社会の課題が見えてきたようだ」という評価も得ているが、そうした学びを3年生の実習でどのように統合して活用するかはわからない。今後の評価が楽しみである。

5. 今後の目標

・学生との接し方：学生個々の「人を支える人になる」という目標の実現を支援するために奈良学園大学では「奈良学園大学コミットメント」が発表されている。学生を主体として関わり、自分の考えを安心して発言、行動することために学生一人ひとりの挑戦を応援すること、学生の相談事に寄り添い、ともに成長する姿勢で関わることをオープンキャンパスや在学生の面談時に公表し実践が伴うように意識して学生に接している。また、何らかの理由で学びの継続に困難が生じた場合には、本学にはいろいろな相談・助言を頂くことができる組織があり、健全に、有効に機能しているので活用させていただくとともに、自身も学生・保証人とアドバイザー教員の面談に参加して、それぞれの立場の多様な意見を伺い、学科運営に活用していきたい。

・学生が主体的に行動できるような仕掛けをあちこちに作ることである。

成人老年看護学では実習科目が4科目ある。学習を積み上げていくイメージをどのようにさせるかが直近の課題であった。3年次生の実習開始にあたり「成人老年看護学実習の4つの科目は、これまで学修した教養科目、専門基礎科目、成人老年看護学概論・援助論・援助論演習の知識・技術を実際の看護状況へ適応し、学びを統合する重要な科目であること、病院、施設等で療養する成人・老年期にある人々（Adolescent and Young Adult<AYA>から人生の最終段階を生きる年代まで）の多様な生活の営みの中で起こる特定の健康課題に対して、対象と看護師関係で遂行される看護実践の基礎的能力の修得を目指すこと、対象への看護の展開方法については、これまで基礎看護学実習ではわずかな情報を手掛かりに推論・論証を繰り返して課題発見や要因の探索に重点をおいた学習を経験したが、これからは時系列に沿った、多くの情報から必要な情報を選択し、対象の全体像をとらえて重要で優先順位の高い、本質的な課題を抽出し、個別の情報をフルに活用して看護計画を立案すること、臨地実習ではさらに広く、深く、看護について思考を巡らせるように、一定の流れと文脈に従って看護過程を展開できることを期待することにした。大事なことは、対象を生活の主体としてとらえること、健康課題が発覚してからこれまでの療養経過を知り、看護を考えるきっかけをつかむこと、情報収集の視点とその理由を明確にし（解剖生理、疾病の成り立ち、検査、治療、看護の一般的な知識）情報収集を行うこと、対象を理解するための概念を活用すること、生活の営みについて独自のパターンを知ること、得られた情報をアセスメントし、その結果を統合して全体像を捉え、本質的な看護課題を抽出する」「優先順位をふまえ目標と評価日を決め、目標到達のための計画を立案し、実施・評価を行う」という基本の流れを修得していることが前提になる。

成人老年看護学実習のゴール目標は、対象の状況に調和（矛盾がなく、全体がほどよくつりあって、まとまっている、fit、match）したオリジナルなプランを作成し、実践や看護の評価・修正に重点を置いて看護を展開することである。そして、実習回数を重ねるごとに看護過程のプロセスはよりスムーズに、より先を見通して、より根拠を明確にして、課題発見と要因の見極めができること、そして、課題（問題）の要因は絶えず移り変わっていくことをふまえて、対象の生活を広げ、クオリティを高めるためのオリジナルなオーダーメイドのプランを考案できること、繰り返し実施・評価を行い、対象の状況に適した看護を実践していくことである。4科目の実習が終了する頃には学習の成果を点検し、自分の優れている部分や改善すべき部分に気づき、対処し、確かな看護実践力を修得することを期待している」ことを伝えようと考えている。その仕掛けが有効に機能するか否かは次年度に評価する。

・ 必要に応じて根拠資料を添付（シラバス、授業評価アンケート等）

令和6年度シラバス、令和5年度授業評価アンケート参照

学部・学科	保健医療学部・看護学科	氏名	上野栄一
1. 教育の責任			
担当科目について：学部では、精神看護学特論、保健医療学概論、チーム医療論、チーム医療論演習、カウンセリング論を担当し、大学院では、医療倫理特論、精神看護学特論Ⅰ、精神看護学特論Ⅱ、精神看護特論Ⅳ、コンサルテーション論、在宅看護学特論Ⅱ、精神看護学演習を受け持ってきた。			
2. 教育の理念・目的			
大学の示す、「人を支える人になる」、をめざすための教育を心掛けた。また、「高度な専門学術知識に裏付けられた、実践力を有する有能な人材を教育・養成し、地域社会及び社会全体の発達・発展に貢献する」という大学の建学の精神」と保健医療学部の「幅広い教養と豊かな人間性、国際性、変化に対応できる汎用的能力を備え、「人」を中心に据えた専門的知識と高度な技術、創造力、実践力、倫理性、協調性を身につけた「保健医療従事者」の育成を目指しています。」とあるように、想像力、実践力、倫理性、協調性を大切にしながら、個人、集団、地域に貢献できる保健医療の専門職を目指す教育を目指してきた。また、「人と自然を愛する心をもち、看護職に興味・関心のある人。また、確かな基礎的学力を有し、看護職者に必要な知識・技術を積極的に学び、地域社会、国際社会に貢献する意欲のある人」を目指すために、基礎から応用力を身につけるとともに理解から実践できる能力を身につけさせることを目的としてきた。 [EBNを意識した教育]現在EBNの基づく実践が求められており、科学的根拠に基づいたケアの紹介にも力を入れてきた。 [国家試験対策]授業の中で、看護師国家試験対策に関わる内容についても学生に適宜教授してきた。			
3. 教育の方法			
新型コロナウイルスの位置づけが、感染症5類となり、対面授業が戻ってきた。コロナ禍では、対人関係能力、コミュニケーション能力の低下が危惧されている。また超高齢化社会が進む中、精神疾患も増加傾向にあり、このような医療情勢、社会情勢の中、アクティブラーニングを取り入れたり、学生の学びの評価やフィードバックを強化してきた。そのためには、一コマ一コマの授業内での授業の目標の明確化。授業終了後の理解度チェックをしていく。さらに教材観として、わかりやすい教材作りをするとともに、視覚教材を適宜取り入れ、資料についても、理解を促進するために図表を多くもちいる工夫をした。教育の方法の基本は、1) 広く豊かな社会的常識をもち、人間的社会的に成熟した人を育てる教育、2) 教育に対する使命感と情熱をもち、教育的な関係を築く力をつける教育、3) 教育の専門家として各教科の内容及び指導法を実践的に深める教育、4) 一人一人の学生を理解し、集団を指導する力を身につける教育、5) 自己教育力をもち、セルフマネジメント能力と生涯学習能力を身につける教育、6) 学校内外の人々と連携しチームとして活動できる力を身につける教育、7) 日本の伝統文化を深く理解し、国際的な感覚を身につける教育を目指してきた。また、予習・復習についての学習時間を増やすために。次回の授業の予習事項を表示した。さらに、学習効果を上げるために、ミニッツペーパー（学習した内容、質問事項等）を授業の最後に記載していただき、理解度を高め、学生の質問にもフィードバックするよう工夫をした。さらに学修相談など双方向の学生とのコミュニケーションを円滑にするために、授業中での学生への質問をして学生の反応（理解力）をみながら進めた。また双方向の授業として、クラスルームを有効に活用し、学生との授業内容についての質疑応答について活用してきた。 [自己研鑽について]日本精神保健看護学会、国際ケアリング学会、日本懸念心理学会、日本看護看護研究学会、日本看護科学学会に入会しておりコロナ禍ではあったがZoomを中心に参加して、精神看護学、看護研究、看護教育の最新の知見を学び、さらに研究力の向上、教育力の向上に務めてきた。 [学生への支援] 学習内容に関するものが多かったが、まずは学生の話をよく聴き、学生の力をひきだせるように、初めから答えをいうのではなく考えさせる工夫をして、理解力のアップにつなげてきた。			
4. 教育の成果			
教育の成果として、昨年担当した科目で全員が合格した。精神看護領域の科目カウンセリング論では、授業評価は、積極的参加、説明のわかりやすさ、説明のわかりやすさなど8項目中6項目が5点（最高点）であった。授業ではミニッツペーパーも活用し、学んだ内容について記載するだけでなく、質問事項も記載していただき、次の授業に活かすといった取り組みをしてきて双方向の授業が活性化してきた。授業態度もよく、真剣に授業に取り組んでいる。学修効果としての評価は、全員合格であり、授業で工夫してきたミニッツペーパーの活用は大きな効果があったと考える。今後は、さらにアクティブラーニング適宜も取り入れていき、学生が主体的に学べる、そして学習意欲を工場させるために一人一人の学修状況を鑑みながら授業を点かいたい。			
5. 今後の目標			
看護学科のDPに基づき、新カリキュラムの教育内容を基に、教材作りをするともに、学生とのコミュニケーションを多くとり、授業を活性化させたい。また、学生の対人関係能力、コミュニケーション能力を工場させるためにも双方向授業をしていきたい。さらに学生には、社会の変化により刻々と変化する保健医療ニーズに対応できるように、知識と技術（実践力）を高め続ける意欲向上させる学修支援をする。今後の短期的目標としては、認知レベルでの理解力をあげるために形成評価をして、長期目標としては、学修の理解力をあげることを目標とする。			

- ・ 必要に応じて根拠資料を添付（シラバス，授業評価アンケート等）

ティーティングポートフォリオ

学部・学科	保健医療学部 看護学科	氏名	臼井 キミカ
1. 教育の責任			
本学への就任初年度であることに鑑み、前任者の実績等を最大限に踏襲して本学の学部及び大学院教育のさらなる質の担保に努める。 1. 担当授業科目 ①保健医療学部 看護学科：成人老年看護学概論 成人老年看護援助論演習Ⅰ 成人老年看護援助論演習Ⅱ 成人老年看護援助論演習Ⅲ 成人老年看護援助論演習Ⅳ 成人老年看護学実習Ⅳ 国際看護論 国際看護論演習 卒業研究Ⅱ ②大学院 看護学研究科 看護学専攻：国際医療論 国際看護特論 ヘルスプロモーション特論 看護倫理学 看護研究特論 在宅看護学特論Ⅰ（在宅看護学） 在宅看護学特論Ⅱ（慢性期） 在宅看護学特論Ⅲ（回復支援） 在宅看護学特論Ⅳ（地域包括支援）在宅看護学特論演習 特別研究 2. 各種学習支援： ①保健医療学部看護学科アドバイザー担当学生の教育・相談に丁寧に応じる。 教務委員会活動として役割遂行する。 ②大学院 看護学研究科 看護学専攻：特別研究の担当修士生に対しての研究指導・助言し、本人が目指す研究成果が達成できるよう支援する。			
2. 教育の理念・目的			
1. 自らの教育理念と目的 教育とは、本来その人が持っている潜在能力を発掘し、その力を伸ばすことであり、決して一方的に教え込むことではないと理解している。特に、看護は、「人を支援することを業とする人を育てる」ことを目的としているわけであり、そのためには看護職自らが豊かな人間性を育むことが重要であると考え。現状社会では様々な課題が山積しているが、その中でも、学生には入学してきたことのご縁を大切に、特に本人の自尊心と自立心を育むための関りを最優先していきたいと考えている。 2. 価値観・信念 教員自身の価値観・信念を押し付けて教育・指導するのではなく、万一、そのことが効率的であったとして、教員の研究の下請け的な課題を提示したりは決してしてはならないこと、たとえ時間がかかろうとも学生本人が何を学び、何を研究したいと思っているのかを懇切丁寧に聴きとり、時に励まし、時には共に悩みつつ、学修者主体の学修・研究成果を自らが学び取ることを支援するのが教員の役割である。そのような支援方法が、将来、看護職になったとき、今、最も求められている「対象者主体の考え方・看護支援の方向性」を確実にするものであると信じている。			
3. 教育の方法			
1. 学生との接し方 接し方の中で1つを挙げるとしたら、「学生の思いをしっかりと聴くこと【聴くとは耳をそばだて、心を込めて聞くこと】」を心がける。このことは看護援助の場面で、安易に「あなたのことがよくわかります」と言うのではなく、当事者が本心から納得できるような関りが求められており、信頼関係の構築では、必須の要件であると考えからである。 2. 授業の工夫（授業方法、内容等） 常に最新の研究成果や、我が国や諸外国を含めての最新の統計情報等を収集して講義に臨むよう心掛ける。そのために、常に各種学術誌、新聞やテレビからの最新情報の収集に心がけ、講義資料の作成を実施している。 3. FD/SD活動等に係る研究会への参加 学内の研究会へは必ず出席するように心がけており、特に私の研究課題である「認知症・高齢者虐待等の関連の情報」に関しては、いわゆる社会的弱者への教育・研究・支援に繋がっていることを意識して活動・実践している。 4. 自らの専門分野の成長 現在、所属している学会は、日本看護科学学会、日本老年社会科学会、日本老年看護学会、日本在宅ケア学会、日本認知症ケア学会、日本高齢者虐待防止学会、日本公衆衛生学会、日本生命倫理学会、日本保健医療社会学会、日本社会医学学会に所属して常に研鑽に努めている。また、私的な研究会活動としてシルバーボラティア研究会に所属して、常に地域の新規の関連活動の掘り起こしとその成果の発信・啓発に努めている。なお、この研究会の趣旨は、高齢者であるからとか、認知症であるから社会貢献はできないということでは決していないことを社会的に発信し、啓発することを目的とした研究会である。			
4. 教育の成果			
1. 達成できたこと、できなかったこと 本学への就任初年度ということもあって、達成できたことより、できなかったことが多い。その理由の一つは、本学の教育・管理システムに慣れることに精一杯であり、自分なりの創意・工夫には至らなかったということであり、深く反省している。未だに十分に理			

解していない内容もあるため、早くこれらのシステムに慣れること、さらに、教職員の皆様との連携・協力を大切にして前向きに取り組んでいきたいと考えている。

5. 今後の目標

1. 短期的・長期的目標

既に社会的には定年を超えている年代であり、体力、気力等の限界を自ら感じつつも、これまで色々な方々にお教えいただいた内容や、これまでの研究等の成果を少しでも多く、そして活用しやすい形にしてお返ししたいという思いで日々研鑽の毎日である。以上とが、現在の私に課せられた責務・役割だと認識しており、着実に一歩ずつ歩みを進めていきたい。

・ 必要に応じて根拠資料を添付（シラバス，授業評価アンケート等）

学部・学科	保健医療学部・看護学科	氏名	阪元 勇輝
1. 教育の責任			
担当している講義科目は、保健医療学部および人間教育学部の両学部において、共通教育科目である「環境化学の基礎」および「生活と環境」である。将来、主として医療分野や教育分野に従事することを目指している学生に対して、化学の基礎、環境問題および災害問題に関する基本的な事項から、より実践的な事項まで、身近な問題としてとらえることができるような授業を展開し、これらの問題に対してどの様に対処し、行動すべきなのかについて修得できる教育を担当している。また、保健医療学部の看護学科においては、「ラーニングスキルズ」および「ライティングスキル」、また、リハビリテーション学科においても、看護学科の「ライティングスキル」と同じ講義を担当している。 担当科目の概要は以下のとおりである。 ・「環境化学の基礎」では、日常生活に関わる化学物質・化学反応やそれらに起因する環境問題について、それらのメカニズムや人体・社会・環境への影響を理解し、その影響を最小限に抑え、生活の質を向上させ、自然環境を守るための方策を考えることができることを目指している。 ・「生活と環境」では、日常生活に関わる環境問題や自然災害について、それらのメカニズムや人体・社会への影響を理解し、その影響を最小限に抑え、生活の質を向上させるための方策を考えることができることを目指している。 ・「ラーニングスキルズ」（看護学科）では、まず、大学での学び方を身につけ、文献や資料を適切に調べることができ、それらを分析的かつ批判的に読んだり、得られた情報をもとに、論理的かつ多面的に思考することができることを目指している。 ・「ライティングスキル」（看護学科・リハビリテーション学科）では、大学での学術的なレポート・論文の作成において、自分の意見を根拠を示しながら、かつ自分の意見と他人の意見を明確に分け、論理的な構成で示すことができることを目指している。			
2. 教育の理念・目的			
教育の理念・目的として、重要視していることは、主として、「自主的な学習」、「問題発見能力」および「問題解決能力」であり、それぞれの項目に対し、興味を持つように、また興味に対して論理的な考え方や展開ができるような教育を目指している。 上記3点に関して、以下の様に考えている。 1) 「自主学習能力」：学術や技術などに常に探求心をもって自らが習得できる力の育成多面的な視点を持ち、常に自分の頭で考える思考性向の育成 2) 「問題発見能力」：上記1) の能力の育成することにより、 自ずと様々な疑問点等が生じることとなり、必然的にそれらが課題や問題点となる。常に疑問点や問題を持ち続けることによる問題発見能力の育成 3) 「問題解決能力」：上記1) および2) の能力を育成することにより、 その中から自らが興味を持つ疑問点や課題を問題点として捉え、それらの問題点等に対して、自らによる論理的な思考やアプローチにより問題解決する能力の育成			
3. 教育の方法			
上述の教育理念に基づき、担当講義に関する基本的な知識および理論等の興味や理解を深めるために、できるだけ身近な問題や事象としてとらえることができるように、具体的でかつ日常的な多くの事例と関連づけて解説することを目指している。また、他の関連する専門科目の基礎となる、あるいは他の専門科目に応用ができよう知識や理論等を関連付けて解説するよう務めている。 上記に関して、以下の様に考えて講義を行っている。 ・授業の進行：教科書や資料の文字や図だけでは理解しにくい専門的な内容について、独自に作成した資料等により事例、実写、動画などを用いながら可能な限りわかりやすく伝える。 ・授業時間外での学習：講義時において、その講義時に自らが興味持った内容、あるいは疑問に感じた内容に関して、その理由や自らとの関連性を問う様な課題を課している。 ・テスト（成績評価）：自らの興味や疑問点を掘り下げ学習する自主学習能力を育成することを目的とし、自らが選択したテーマ（疑問や問題点等）に関して、選択した理由や自らとの関連性およびその問題点等に関する自らの対応策を記述させる論述式の試験を課している。			
4. 教育の成果			
両学部の共通教育に関しては、アンケートによると、講義内容・資料等に関しては、「講義資料などが分かりやすく講義に取り組みやすかったです。」、「教科書を使うだけでなく、自分の意見や考えを述べることで考えやすかった。」等があり、課題等に関しては、「自分で調べて文を構成するので文章力が高められるところ。」、「自分で資料を読んでそれについて書く際に自分でも調べて書くようにするといろいろなことを知識として吸収できました。」等の肯定的なコメントであるが、一方で、少数ではあるが、「講義内容が難しすぎる」、「1年次で行う講義内容ではない」等の否定的なコメントもある。今後の講義に向けて、各講義で肯定的なコメントが得られた部分に関しては今後も継続し、否定的なコメントが得られた講義の難易度の部分に関しては、各講義の難易度を検討するとともに、より良い講義方法を模索を行っていく必要があると考えている。			
5. 今後の目標			
1) 短期的な目標 1. 身近な問題としてとらえることができるような事例・事例の導入			

- | |
|--|
| 2. 授業時間外により自主的に学習するような課題や目標の設定
3.より理解しやすい、講義・学習ツール（画像、動画等）の発掘
2) 長期的な目標
1. 学生のレベルに沿ったテキストの発掘、あるいは開発
2. 助言のみで、学生が自主的に学習する環境づくり
3. 最新の知見を講義に取り入れる |
|--|

・ 必要に応じて根拠資料を添付（シラバス、授業評価アンケート等）

添付資料無し。

学部・学科	保健医療学部 看護学科	氏名	西園 貞子
1. 教育の責任			
2024年担当科目：1年生～4年生の学部授業ならびに大学院授業を担当している。 <u>学部</u>・1年生担当科目：看護学概論Ⅰ、看護学概論Ⅱ、看護コミュニケーション、看護技術の基礎Ⅰ、基礎看護学実習Ⅰ ・2年生担当科目：看護実践プロセスⅠ、看護実践プロセスⅡ、看護技術の基礎Ⅱ、基礎看護学実習Ⅱ ・4年生担当科目：看護研究Ⅱ、看護管理学、チーム医療論演習、感染看護学、統合実習、看護教育学 <u>大学院</u>・看護管理特論、看護理論特論、看護教育特論 各種学生支援：アドバイザー学生への支援、教務部会、実習WG / 教務部会では、学生の学習効果が高まる教育実践に向けた時間割調整、試験実施計画調整などを行う。実習部会では、授業時間の25%を占める看護学実習の質の向上と、学生の実践能力の育成を目指して、①教育理念、ディプロマおよびカリキュラムポリシーの一貫性を踏まえた臨地実習の構成、②臨地実習指導体制づくり、大学-施設双方の連携などを行う。			
2. 教育の理念・目的			
自らの教育理念・目的 学生は将来を担う人材である。本学の理念である「明日の社会を開く人材育成」を多様な価値とともに変化する時代の進展に対応し、主体的に未来を拓く人材育成を目指している。 ・「人を支える人」として未来を担う人材としての成長を目指し、創造力、思考力、判断力や実践力の育成 ・広い視野と創造性をつちかい、主体的に探究的に課題に取り組み、誠実で協調性のある実践力で課題解決を図る人材育成 教員としての喜びは、学生の成長である。			
3. 教育の方法			
・学生とのかかわり 学生の意見は否定せず常に耳を傾ける。疑問や懐疑はそのままにしないように、学生の興味や関心を手がかりにして<u>探究的に思考を拡大</u>できるように並走に努めている。 ・授業の工夫 学生が「何を学び学び深めるのか」を理解し<u>能動的な学習者として授業参加</u>できるよう、授業目標の共有に注力している。 断片的な知識獲得ではなく、生きた知識として活用できるよう、全ての担当授業で、毎授業後に「学びの振り返り」として、200字～1000字程度での学びの言語化を求めている。毎回の授業で、<u>学びを自分の言葉で表現すること</u>、疑問に思うことについて自由記載された内容は、次回の授業に反映し、全ての学生と理解の共有を図っている。また、看護実践プロセスⅠ-ⅡではディープアクティブラーニングであるIBL学習法（課題発見・課題解決学習）を活用して、臨床場面で必要となる仮説-論証力とチーム力の強化を図っている。この探究型学習の根幹となる課題発見力の育成については、担当する科目で仕掛けを工夫に努めている。 ・SD・FD参加 本学で開催された研修会は全て参加。2023年度の本学看護学科FD研修では、IBLの活用を含め、基礎領域の授業設計と実施について講演し、効果的な教育について検討を図った。また、他大学の教学マネジメント研修にも積極的に参加している。			
4. 教育の成果			
・教育成果 前述の授業ごとの「振り返り」コメント内容の変化から、授業の進度に応じた学生の反応から学生の成長を実感している。 演習や実習では、教員間連携も教育効果と連動するため、教員間での目標共有を密に図りながら進めた結果、学生の達成感と教員の一定の充実感を感じることができている。			
5. 今後の目標			
・学生の能力向上には、戦略的な関わりが必要と感じている。領域の教員連携だけでなく、領域間、学科、学部の教員が、本学の学生をどのように育成し、どのような能力獲得を目指しているのか、このような目的共有を図る活発討議を重ねていきたい。 また、看護師としての生涯に亘る能力育成においては、継続的に能力の獲得状況を共有し、教育の質向上につなげることが重要と			

考える。客観的指標として、開発した看護師版PROGの活用で本学の教員間ならびに多くの大学と連携して人材育成に取り組みたい

学部・学科	保健医療学部・看護学科	氏名	服部 律子
1. 教育の責任			
1. 副学長として教育の質保証に向け、関連する各委員会が連動して機能するようマネジメントを行う。 2. 学部長として、両学科の運営を支援し、学部全体での教育の質保証に向けマネジメントを行う。 3. 保健医療学部看護学科における教育 1) 母性看護学及び助産学領域における教育計画の立案や教育内容のマネジメント、実習施設との教育内容や指導方法に関する調整を主に行う。 2) 令和6年度は以下の科目を担当し、看護学及び助産学の教育を行なう。 (2年次生) 母性看護学概論、母性看護援助論 (3年次生) 母性看護学実習、助産学概論、リプロダクティブヘルス学、助産診断・技術学Ⅱ (4年次生) 助産管理論、統合看護実習、助産学実習Ⅰ、助産学実習Ⅱ、助産学実習Ⅲ、助産学実習Ⅳ 3. 大学院看護学研究科における教育 1) 令和6年度は大学院看護学研究科の以下の科目を担当し、大学院教育を行う。 育成看護学特論Ⅱ、育成看護学特論Ⅲ、育成看護学特論演習、特別研究 2) 育成看護学領域を専攻している2名の大学院生に対して、主指導教員として研究指導を行なう。 3. アドバイザーとして、3年次生1名を担当し、学修や学生生活に関する支援を行なう。 4. 看護学科FD委員長として、令和6年度は新カリキュラムのカリキュラム評価、学びのマイルストーンの作成、学習動機づけを高める介入の検討等を担当する。			
2. 教育の理念・目的			
学生が、4年間の学修の成果として、自ら考え行動する力を持った人間となれるよう、そしてその力を看護という専門的な場面で発揮できるようになることを目指して教育に携わっている。 そのために大切にしていることは、学習者の主体性の尊重と成長の機会の提供である。また、機会を活かして学習できるようにするために、学生の状況や特性に応じた支援にも留意している。			
3. 教育の方法			
1) 学生との接し方 学生の考えや感じたことを聞く、行動の理由を聞く。学生の考えや感じたことを否定するのではなく、学生自らが改善すべき点や補うべき点に気づけるような接し方を心がけている。 2) 授業の工夫 配布用シラバスを作成し、授業の初回に15回分全ての事前事後課題や課題の評価基準を詳細に示し、学生自らが計画して行動できるような工夫をしている。評価基準を明示するとともに、筆記試験やレポート等の課題は学生に返却し、公平性を実感できるようにするとともに、学生の疑問に対応できるようにしている。また、授業方法では、時系列やテーマごとに授業を配列し、学生が流れに沿って学習することで混乱しないようにすることや、実際場面を示しながら授業することで今の学修がこの先にどのようにつながるのかを学生がイメージできるよう心がけている。 特に学習目標を具体的な実習内容に落とし込んでイメージすることが難しいことを踏まえ、学習目標を細分化し、細分化した各項目にルーブリックを作成し、評価の視点や基準を学生と共有することによって			

目指すべきゴールをイメージしやすいよう心がけている。

加えて、母性看護学領域の学修内容をICEモデルにして学生に示し、どの科目でどの項目を学ぶのかを明示し、母性看護学領域における段階的な学習のイメージが持てるようにするとともに、科目間の関連性を理解できるようにしている。

3) FD/SD活動等に関わる内外の研修会への参加

学内のFD研修会に参加するとともに、高等教育での教育方法や学生支援に関する研修会に年1～2回参加している。また、日本高等教育開発協会正会員として参加し、高等教育開発に関する会員間の情報交換を行うなどしている。

4) 自らの専門分野の成長

周産期の母子のケアに関わる共同研究に取り組み、研究の成果を母性看護学や助産学の教育に盛り込むようにしている。

4. 教育の成果

FDに関する研修会での学びを活用しながら、様々なアクティブラーニング手法を活用した授業を行うことができた。学生たちからは、グループワークによる学びの深化や自分の言葉にして理解できたことへのリフレクションがあり、ある程度の成果は上がっていると考えている。また、前年度から取り組みを検討している、助産師課程の教育内容のICEモデルの整理が完成できていないため、この点についても今後の継続した取り組み課題である。

配布用シラバスを活用し、15回の授業計画を具体的に示したり、課題を事前に明示したり、評価方法を具体的に提示するなどしているが、学生のレディネスの変化に伴い、その取り組み状況や最終の学習成果が二極化してきており、通常の授業の取り組みだけでは学修が困難な学生が繰り返し復習できる仕組みの検討や、コースの途中での教育内容の調整の工夫が課題である。

5. 今後の目標

1. 短期目標

1) 助産師課程の教育内容をICEモデルの整理を完成させ、学生自身が自らの学びを体系的に捉え、その成果を実感できるようにする。

2) 新カリキュラムの3年目を迎えるため、科目間の関係性を再度確認し、D Pに向けて学生が学習を積み上げられるようにする。

3) 入学後の学生のアイデンティティの拡散を考慮しながら、2022年度に導入した1年次終了時点で2年次への学習の動機づけを支援する取り組みを継続して実施するとともに、その効果を客観的に評価する。

2. 長期目標

2022年度からスタートしている新カリキュラムのカリキュラム評価を行い、母性看護学領域、そして看護学教育全体の教育効果を明らかにし、カリキュラムの改善に向けた取り組みを行う。

- ・ 必要に応じて根拠資料を添付（シラバス、授業評価アンケート等）

学部・学科	保健医療学部 看護学科	氏名	小池 伝一
1. 教育の責任			
1. 保健医療学部看護学科における教育 1) 小児看護学における教育計画立案・教育内容のマネジメント、実習施設との教育内容・指導方法の調整をおこなっている。 2) 令和5年度は以下の科目を担当し、看護学教育を実施した。 (1) 2年次生；小児看護学概論、小児看護援助論 (2) 3年次生；小児看護援助論演習、小児看護学実習 (3) 4年次生；卒業研究Ⅱ、統合看護実習、統合看護論 2. 大学院看護学研究科における教育 令和5年度は、育成看護学Ⅲを担当し、大学院教育をおこなった。 3. アドバイザーとして、1年次生 4名、2年次生 3名、3年次生 2名、4年次生 3名を担当し、学修・学生生活への支援をおこなった。 4. 看護学科では、教務部会、FD部会の委員として、看護学科の教育向上に向け、履修の手引きの検討、カリキュラムシラバス作成に貢献した。			
2. 教育の理念・目的			
学生が、4年間の学修の集大成として、自律的に考え、主体的に行動できる看護職となれるよう、また、看護の職能集団として専門的な知識を用いて活躍できることを目的として、教育に関わる。そのためには、学生一人ひとりの考えを尊重し、自らの考えを大切に行動できるよう、かかわっている。また、個々の学生の特徴に応じたかかわりにも配慮している。			
3. 教育の方法			
1) 学生とのかかわり方 教員が答えを提示するのではなく、学生の考え・意見・理由を聞き、学生の考えを受け止める。その上で、学生自ら改善点などが考えられるよう、接していく。 2) 授業の工夫 初回授業で、15回の内容・課題・評価基準について提示し、学生が主体的に学習計画が立案できるよう工夫した。できるだけ学生の疑問にこたえられるよう、授業終了後に、リアクションペーパーを用いて、疑問を拾い上げ、次の回の最初に疑問に答える方法を用いて、フィードバックした。授業方法では、テーマに沿って配列を整え、学生が流れに沿って学習できるようにした。看護援助の実際については、学生や臨床看護師の事例を用いて、看護の実際を説明した。また、小児看護援助論では、事例を用いて、フィジカルアセスメントから看護援助への考え方について、課題を4回提示し、臨床推論を深めるための支援をおこなった。 3) 研修会への参加 学内のFD・SD参加、文部科学省・厚生労働省主催の研修会などに出席し、他教員などと情報交換をおこなった。			
4. 教育の成果			
研修などを参考にしながら、アクティブラーニングを活用し、授業を実施することができた。学生たちは、自らの考えを自分の言葉をとおしてさまざまな事象について考察し、理解することに繋げることができた。授業評価アンケートでは、概ね平均以上の評価を得ることが出来た。			
5. 今後の目標			
1) 短期的目標 (1) 小児看護展開における臨床推論を深めるための教育を構築し、学生が自主的・体系的に考えることができ、小児看護学実習にてその成果を発揮することができる。 (2) 各領域における学習を踏まえ、それぞれの領域との関連性を考慮しながら、教育を実践することができる。 2) 長期的目標 2022年度カリキュラム開始に伴う評価を行いながら、小児看護学領域、全体の教育効果を明らかにし、カリキュラム改善に向け、取り組んでいく。			
・ 必要に応じて根拠資料を添付（シラバス、授業評価アンケート等）			

学部・学科	保健医療学部 看護学科	氏名	小林 由里
1. 教育の責任			
1) 2024年度担当科目：看護学概論Ⅱ、コミュニケーション論、看護技術の基礎Ⅰ・Ⅱ、看護実践プロセスの基盤Ⅱ、基礎看護学実習Ⅰ・Ⅱ、卒業研究Ⅰ・Ⅱ、統合看護論、統合看護実習、看護管理学、感染看護、ターミナルケア論、看護管理学特論（大学院）、看護理論特論（大学院） 2) 各種学生支援：2024年度：アドバイザー学生への支援、キャリア部会、教務部会、全学教務委員会、自己点検自己評価委員会、入学前スクリーニングプロジェクト 教務部会では、本学のディプロマポリシーやカリキュラムポリシーにそった教育の実践と、学生の学習効果が高まる教育に向けた、時間割の調整や、試験実施計画、講師との調整などを行っている。また、学修を主体的に進めることが困難な学生のフォローアップについて検討する。4年次生の卒業研究Ⅱにおいて、論文執筆、提出に向けたオリエンテーションやスケジュールの計画と抄録集の作成を行う。			
2. 教育の理念・目的			
本学保健医療学部教育目的、ディプロマポリシーに則り、教育活動においては、以下の3点を目的としている。 1) 看護の対象を生活者として捉え、尊厳をもったかけがえのない一人の人として対応できる豊かな人間性の育成 2) 看護実践において必要な基礎的な知識、技術の習得と自ら考え判断し、実行できる力の育成 3) 誠実で、倫理的判断や意思決定ができる力の育成 人は、多様な価値観や信念をもって生きている。その多様性を受け入れ、認められる人間性と誠実さは、人を対象にした看護職に大切なことであると考えている。また、主体的に学び、看護職としての創造力、思考力、判断力や実践力を持った人の育成を目指している。			
3. 教育の方法			
教育の理念や目的を達成するため、以下のような方法を実施している。 1) 授業の工夫：各授業の目標を毎回の授業前や授業終了時に提示・説明し、学生が毎回どのようなことを学ぶのか心づもりができるよう工夫している。特に1, 2年次は、看護の初学者であり、看護実践場面のイメージがしにくいいため、できるだけ臨場感を持たせる演習方法を工夫している。また、技術演習の事前事後には、自らの疑問を整理し、演習での体験により疑問を解消できるようにすることや、実習体験を想起し、園主後にその意味づけ・深化を促すような課題を提示している。学生が、自ら考えながら取り組むことができるよう、様式の工夫や学習量を調整している。看護実践は、手順や方法がわかればよいのではなく、その対象が一人の尊厳ある人であり、生活者であるという意識をもち、倫理的にも配慮した関わりについて考えることができるよう、発問などで問題提起をして思考を促している。さらに、学生が、看護に関心を高め自分のキャリアデザインを開発していけるよう、また自ら主体的に学ぶ力の育成をねらい、私自身の臨床での経験を教材化して活用している。特に、看護実践における安全と倫理観は不可欠であり、各講義・演習・実習指導に当たっては、強調して教育内容に取り入れている。 2) 学生へは、自分の考えを自分の言葉で語れるようになってほしいと考えており、実習などでは、自らの学びのプロセスを語ってもらうようにし、学習者の学習目標到達度を確認している。学生がどのように感じ、考えているのかを共有しながら、目標到達へ導くように心がけている。			
4. 教育の成果			
1) 授業の工夫：R5年度はほぼ対面授業や演習が実施できた。演習では、単に技術の方法を修得するにとどまらないよう、事例を用いてどんな対象になぜその支援が必要なのか、なぜその方法で行うのかを考えることに重点を置いた。個々に取り組んだ課題学習について、演習ではグループワークを通して試行錯誤し、他者の意見も取り入れながら体験と思考を繰り返して学ぶことを目指した。特に1年次は基礎看護学実習Ⅰの体験を想起しながら演習で実際に体験することで、見学した看護師の実践を意味づけすることができ、学びが深まっていた。毎回、最初に前回の授業・演習の振り返りについてフィードバックすることで、学生の思考を揺さぶり、さらなる思考の深まりにつなげることができた。ただ個人差があるため、個々の力量に合わせた支援が必要である。自身の臨床での経験の教材化についても、学生からの授業後振り返りシート等の記載から、イメージ化につながったという反応があったので、今後も活用していく。			
5. 今後の目標			
1) 短期目標：基礎看護学領域において、 ①看護実践の基礎となる知識・技術について、学生が自ら考え、主体的に行動して実践できる教育の実践。 ②看護の対象を尊厳をもった一人の人と捉え、倫理原則に基づき判断できる力を育成する。 2) 長期目標：学生が自ら考え、行動できる力、臨床判断力を育成するための教育方法として、アクティブラーニングやIBL（(Inquiry Based Learning)）に関する教育方法の修得を目指し、活用できる。			
・ 必要に応じて根拠資料を添付（シラバス、授業評価アンケート等）			
自らの授業実践力や教育力、研究実践能力の向上のため、本学のFD/SD研修への参加はもちろんのこと、学外の研修会へ参加している。また、学内には、アクティブラーニングやIBLに長けた教員がおられるので、勉強会の依頼などにより、研鑽していきたいと考えている。学会については、日本看護学教育学会、日本看護診断学会、日本看護研究学会、日本エンドオブライフケア学会、日本看護診断学会に所属している。現在エンドオブライフケアと看護師の経験知に関する研究に取り組んでいる。2024年4月に日本看護診断学会学会誌に論文掲載予定である。			

学部・学科	保健医療学部・看護学科	氏名	蓮池 光人
1. 教育の責任			
1. 保健医療学部看護学科における教育 1年次生：保健医療概論 2年次生：精神看護学概論、精神看護援助論 3年次生：精神看護援助論演習、精神看護学実習 4年次生：カウンセリング論、卒業研究Ⅱ、統合看護論、統合看護実習 2. 大学院看護学研究科における教育 精神看護学特論Ⅰ、精神看護学特論Ⅱ、精神看護学特論Ⅲ、コンサルテーション論、看護研究特論 3. 各種学生支援 アドバイザー学生への支援、大学広報委員会、看護学科広報部会、看護学科実習WG、オープンキャンパス			
2. 教育の理念・目的			
1. 自らの教育理念と目的 1) 学生が自ら考え主体的に学ぶ環境を作り支援すること 2) 学生ひとりひとりが、持てる力を最大限に発揮しその人らしく成長するための支援をすること 3) こころのある看護師として成長していくため、相手の立場に立ち、相手の思いを思い描き、相手のことを思いやれる人間力の向上のための支援をすること 2. 価値観・信念 1) 学生ひとりひとりを大切に、「愛すること」「信じること」「揺るがないこと」を信念としている 2) 学生の笑顔を守る			
3. 教育の方法			
1. 学生との接し方 ひとりの人間として尊敬し、尊重し、常に相手の立場に立ちながら、同じ目標を持つ同志として向き合う 2. 授業の工夫 1) 学生が主体的、前向きに授業に参加できるように双方向の授業を行っている。 2) 学生が看護への興味、関心を持てるように看護実践における事例を多く用いて看護へのイメージ作りを行っている。			
4. 教育の成果			
1. 授業後にリアクションペーパーを記入してもらい、次の授業の時に全員分コメントを入れて返却しており、相互の共通認識を高めることができた。 2. リアクションペーパーの内容から精神看護の対象である「人間」「こころ」に対する理解を深めることができたと考えられる。 3. 授業評価アンケートでも平均以上の評価を得た。			
5. 今後の目標			
1. 短期目標 1) 学生が主体的に楽しく学べる授業の確立 2) 自分自身が成長していくための、研修や学会への参加 2. 長期目標 1) がくせいひとりひとりの個性を大事にし、相手の立場に立ちながら、学生と一緒に成長できるための連携の取れた精神領域の確立			
・ 必要に応じて根拠資料を添付（シラバス、授業評価アンケート等）			

学部・学科	保健医療学部・看護学科	氏名	宮本 雅子
1. 教育の責任			
・2023年度担当授業科目：「助産学概論」、「ウィメンズヘルス学」、「助産診断・技術学演習Ⅱ」、「助産管理論」、「助産診断・技術学Ⅰ」、「助産診断・技術学Ⅱ」、「助産診断・技術学Ⅲ」、「助産診断・技術学演習Ⅰ」、「母性看護援助論演習」、「助産学実習Ⅰ～Ⅳ」、「母性看護学実習」、「統合看護学実習」、「卒業研究Ⅱ」 2023年度は主に助産師課程の授業を担当した。学生数が4～5名のため、講義科目であっても、授業の中でショート・ディスカッションや課題提示と学生のプレゼンテーションを組み入れて双方向によるコミュニケーション型の授業を実践した。少人数であるため、科目単元の目標達成に対し、授業中に理解での確認を行いながら進めた。 ・各種学生支援 アドバイザー学生には、メンタル面と学習意欲を持続できるための関わりを重視した。学習方法については、各学生の方法がどの程度有効に学習効果として活かされるか話し合い、最良の方法を学生が見いだせるような支援を実施した。			
2. 教育の理念・目的			
・自らの教育理念と目的 教育理念：幅広い専門的知識と、看護を思考し、探究・実践する力、「人」を理解し尊重でき、協調性もつ人材を養成する。 目的：学生自身が広い視野をもって看護を発見する力や、他の学生との協働を通して誠実さや協調性を身につけられる教育を提供できる ・価値観・信念 価値観：学んで理解できる楽しさが表出される、もしくは学生自身の自己肯定や生きる意欲につながる 信念：個々の学生の思考やニーズから目標に応じた教育的介入を行うこと			
3. 教育の方法			
・学生との接し方 ・授業の工夫（授業の方法、内容） 「ウィメンズヘルス学」では3年生の助産師課程学生4名による、アカデミック・インターンシップを利用した「思春期教室」の企画・実践・評価を実施、「助産管理論」では産科病棟と外来を設立するための企画書作成を行った。病院組織、人事管理、助産業務、病棟環境、人材育成などのシラバスにおける詳細な内容について、企画書に反映し、プレゼンテーションを行い、実践可能性や評価について学生全員と検討した。 ・FD/SD活動等にかかわる内外の研修会への参加 FD・SD委員会、学科の部会の構成員として、全学、および学科の研修会の運営を担当した。 ・自らの専門分野の成長 助産学においては、研究成果や社会情勢から、最新の情報に基づく教材をもとに授業内容を更新した。また、研究分野の内容については調査を行い学会で発表した。			
4. 教育の成果			
・達成できたこと、できなかったこと（達成レベル） できたこと：シラバスの項目については授業時間内に達成できた。学習支援も個々の考えや希望に応じて学習支援ができたと考える できなかったこと：現在進行中である研究内容について、明確になっていないことが多く、授業での情報提供には至らなかった			
5. 今後の目標			
・短期的・長期的目標 長期目標：常に、学生にとって何が重要か問いかけることから、個別や集団に対し、最善と考えられる教育を実践できる 短期目標：以下の1～4について日々の学生や教育的な関わりの中で実践することを目標とする 1. 看護の対象者、および母子とその家族、地域社会における健康問題の捉え方、EBM・EBNに基づく高度な医療の提供に対する思考過程を重視した教育を提供できる 2. 看護の対象者の人権を擁護する倫理について理解が深め、実践可能となるよう事例を用いた教育を重視いたします。看護の対象者のみではなく、大学において同級生や他学部学生との関わり、教職員との他者関係においても相手をいたわり、尊重できる姿勢を身につけることができる 3. 医療に携わる職種の役割を授業で伝え、演習や実習において実践・協働可能な計画立案と実践ができるような教育を展開できる 4. 学生自身が将来像や現在の医療状況や社会のニーズを意識して、1年次より自主的に学ぶ姿勢や、毎日の学習を意欲的、計画的、自律的に行うことができるように、学生個々の特徴やニーズに沿って支援できる			
・必要に応じて根拠資料を添付（シラバス、授業評価アンケート等）			

・いくつかの科目についてのシラバス：抜粋部分

<2023年度ウィメンズヘルス学>

I 授業単元：女性への健康支援プログラムの立案

II 授業目標

- ①思春期の成長発達過程と身体・心理社会的特徴を理解できる
- ②セックス・ジェンダーアイデンティティの形成過程について理解できる
- ③思春期にある人を対象とした集団健康教育の企画書を立案できる
- ④健康教育が実践できる
- ⑤健康教育について評価できる

III 課題

1. 課題

高校3年生10人程度（男女）に対する50分の健康教育を実施してください。

2. 実施概要

- 1) 日時：7月19日（水）10：40～11：20
- 2) 場所：助産学実習室
- 3) 方法：4名で健康教育を50分実施し、実施後は評価とレフレクションを行う

3. 課題内容

- 1) 思春期男女の身体的・心理的・社会的特徴について教科書を含む文献をまとめる
- 2) 健康教育のテーマを設定する
- 3) 指導の短期目標（複数）を設定する
- 4) 企画書の作成：様式はA4サイズで自由書式

学部・学科	保健医療学部 看護学科	氏名	井上葉子
1. 教育の責任			
1. 令和5年度は以下の授業を担当し、学部生（保健医療学部看護学科）と大学院生（看護学研究科）の教育を行った。 （2年次生）公衆衛生看護学Ⅰ（地域活動）、公衆衛生看護学Ⅱ（学校保健） （3年次生）公衆衛生看護学方法論Ⅰ、公衆衛生看護学Ⅱ（学校保健） （4年次生）公衆衛生看護学診断演習、地域包括ケア論、公衆衛生看護学実習Ⅰ（地域活動）、公衆衛生看護学実習Ⅱ（学校保健）、公衆衛生看護学実習Ⅲ（産業保健）、卒業研究Ⅱ（大学院）在宅看護学特論Ⅳ（地域包括支援） 2. 大学正規科目ではないが、4年生を対象にした看護師国家試験領域別対策講座と保健師国家試験対策講座での講義を担当し、国家試験合格に向けた教育を行った。 3. アドバイザーとして、1年次生3名、2年次生4名、3年次生2名、4年次生2名を担当し、学習や学生生活に関する支援を行った。また、看護師国家試験・保健師国家試験の受験対策のための副アドバイザーとして、看護師・保健師課程4年生5名を担当し、国家試験合格のための学習や受験対策に関する支援を行った。			
2. 教育の理念・目的			
基本的な方針として、学びの主体は学生であり、教え込むのではなく学生自身が考え、気づき、自分なりの答えを導き出せることを目指して教育に携わっている。そのためには、考える上でのヒントや道筋は提示しても、答えは先に出さず、学生自身が答えを出すまで待つ時間を確保するなど学生の主体性を育みながら学生自らが成長できる機会を確保することに努めている。			
3. 教育の方法			
1. 学生との接し方 学生と向き合う時間を大切にし、授業のみでなく、構内などで出会ったときの些細な会話も、学びにつながり、なにかの動機づけになる可能性があると考え、大切にするようにしている。 2. 授業の工夫 授業においては各授業の目標を提示し、この授業での内容と目指すべきゴールはどこかを明示している。また、授業における学生の様々な学びの内容を確認するために、授業終了時には「授業振り返りシート」で学生の学びや感想をとらえ、授業を通しての学習の成果を振り返る時間を取るようにしている。また授業振り返りシートに記載された疑問や質問には授業内で必ず答えるようにしている。 授業方法では自身で制作した動画教材等を用いて学生が看護の実際について具体的なイメージがもてるような工夫を行っている。 3. FD/SD活動等にかかわる内外の研修会への参加 学内のFD研修に参考するとともに保健師教育に関する研修会に年1～2回参加している。令和5年度は、全国保健師教育機関協議会主催の令和5年度第1回東海・近畿北ブロック、北陸・近畿南ブロック合同研修会・定例会議に参加した。 4. 自らの専門分野の成長 看護師・保健師による地域活動に関する共同研究に取り組み、研究の成果を公衆衛生看護学の教育に盛り込むようにしている。			

4. 教育の成果

教育の成果として、最も顕著と感じているのは、卒業生が保健師として行政機関で活躍をしていることである。保健師養成に携わる教員として、まずこの部分は成果としてあげたい。毎年、2~5人が保健師として就職しており、保健師として就職しなかった学生も、将来保健師として働きたいという思いを抱く卒業生が多く、卒業後に保健師での就職に関する相談を受ける事も多い。

5. 今後の目標

1. 短期的目標

大学において看護師・保健師として活躍できる人材を育成することである。そして、看護師・保健師となった卒業生が将来にわたって自らの知識、スキルを磨き続けるために主体的に学ぶ意味と姿勢を学生の内から、根付かせて行きたい。そのためには、自身の教育活動、研究活動について学生に伝えることはもちろんだが、学会発表、論文掲載など社会に情報発信することが重要であると考え。

2. 長期的目標

保健師の魅力とその専門性について情報発信し、保健師を目指す人材を確保することである。そして現場で活躍する保健師の活動を支援するための技術、システム等の開発や現任教育に役立つ教材等の開発など、保健師の実践力を向上させるための教育活動・研究活動を行いたい。

・ 必要に応じて根拠資料を添付（シラバス、授業評価アンケート等）

学部・学科	保健医療学部・看護学科	氏名	高橋 寿奈
1. 教育の責任			
1. 保健医療学部看護学科における教育 1) 老年看護学領域における授業計画の立案と授業実施、実習施設との教育内容や指導方法に関する連絡調整を行っている。 2) 令和5年度は以下の科目を担当し、老年看護学と成人老年看護学の教育を行った。 (2年次生)「成人老年看護学援助論Ⅰ」「成人老年看護学援助論Ⅱ」 (3年次生)「老年看護援助論演習」「老年看護学実習Ⅰ」「老年看護学実習Ⅱ」「成人看護学急性期」 (4年次生)「卒業研究Ⅱ」「統合看護学実習(老年領域)」 2. アドバイザーとして、1年次生4名、2年次生4名、3年次生4名、4年次生3名 を担当し、学習や学生生活に関する支援を行った。生活態度面も含め指導が必要な学生には、親御さんにも密に連絡を取りながら十分に学習環境が整い学習に集中できるように支援を行った。 3. 実習WG委員として、学生の実習中における本学における実習中の課題についてや実習協議会や実習報告会について検討し、円滑に学生が実習での学習ができるようにしている。 4. 広報委員として、オープンキャンパスやなどの学事行事に参画し本学の魅力をより強く広範囲に発信できるようにしている。 5. ハラスメント相談員として、学生よりのハラスメントに関する相談にのり学生が意欲をもって学ぶことができる環境を整えられるようにしている。			
2. 教育の理念・目的			
学生が、対象者の背景や生き方をとらえ、相手の立場に立って考え行動でき、学生の独自性を発揮することができるような力をもった人に成長できることを目指して、教育に携わっている。また、障害や病いに苦しみながらもたくましく最後までその人らしく生活するということはどういうことなのか常に考え、そこを支援できる看護者を育てたいと考えている。 そのために大切にしていることは、自ら考えた他内容を確認し、尊重すること。また実施しないとわからないことに対してチャレンジを応援することである。そのために学生の特性を伸ばせるようにわからないことを解決できるように創意工夫しながら肯定的に関わるようにしている。また、昨今増加傾向にある学習に支援が必要な学生に対しても、そのことによってできる限りあきめなくてもよいように支援することを心掛けている。			

3. 教育の方法

1) 学生との接し方

学生が頭でわかるだけでなく得心できるようにしていきたいと考える。そのため「それはどうしてそう考えたのか」などの学生の意見を聞く機会を持つように心がけている。ほかの学生も意見も一緒に確認し、一緒に考えるというスタンスをとるようにしている。また、医療者として事故につながりそうなことや周囲との人間関係をくずし就労時に問題となりそうなことを行ってしまう時は、曖昧にはせずその理由をわかりやすく説明し納得して行動修正できるように伝えるようにしている。

2) 授業の工夫

老年看護学の授業では根拠をもとに看護を行えるようにし、基礎看護学や成人看護学からの発展として考えられるように、対比しながら説明するようにしたり、「自分ならどうか」と振り返りながら学生が考え学べるようにしている。実習では学生の考えを伝えなければならない場面が多いため、普段からパワーポイントを作成させ、人に伝わる要点を確認するような内容の資料作成を課題提出としたり、板書を実際に行ってもらい意見の発表や説明をさせ、自分の意見を言う場を増やしている。学生の創意工夫をのばすため、新しい考えや解釈などがあれば、根拠を示しながら発展として考えられるようにほかの学生へ紹介し、「より良い看護を行っていくにはどうすればいいのか」や「看護には多数の正解がある」という面も理解させるようにしている。そして、「実際の実務ではどうするか」や、「臨床の場では実際にどうされているのか」を紹介することでより具体的に学生が興味をもって援助を考えることができるようにした。高齢者の心身の変化を疑似体験させ、看護の対象である高齢者の理解ができるように工夫した。また、ペアワークをすることで、相手の学生が休むと困るという実際の経験により責任をもってお互いに協力できるようにしたうえで、学んだ先には自身の看護師の姿がイメージできるように工夫した。

成人老年看護学領域では初めての授業内容が多かったが、成人期の授業内容を受けたのちさらにそこから老年期になるとどう変化させるのか、イメージしやすいように構成した。実際に授業の中で学生も参加したロールプレイを行うことで対象患者やその家族の思いを反映させた看護について考えるように促した。また自身の考えを言葉にし表現したり、人に伝える機会を多くもつことができるように工夫した。

3) FD/SD活動にかかわる内外の研修会への参加

学内のFD研修会への参加、学内のハラスメント相談員研修会、奈良県看護協会教員研修、認知症回想療法継続研修に参加した。

4) 自らの専門分野の成長

看護教育にかかわる共同研究と、地域の看護師と一緒に認知症関連の研究に取り組み、授業へ反映させることができるように努力している。

4. 教育の成果

FD研修会や看護協会での学びの内容をいかし、学生の現在の特性を考慮しながら、学習方法を工夫した。

「成人老年看護援助論」学生が言葉だけでなく、板書や提出物への記入、パワーポイントの作成、など様々な形式で自身の考えや学びを整理しまとめ共有をできるように工夫した。また、学生の提出物にはコメントを入れて返却するようにし、意見とや質問として表出されていないことは、できるだけそこからも収集し、次の授業の冒頭で紹介しながら学生に再度考えるように促し、考えの幅を広げ、意見の共有をできるようにした。これらの授業方法の工夫を行ったが、単位習得できなかった学生があった。この科目は授業数が多いため、できるだけ早期に授業についていけるようにアドバイザーとも連携を取りながらさらに授業方法の工夫を行っていききたい。

「老年看護学援助論演習」では、学生がわからないことを質問しやすく全員が経験できるように、ペアワークを中心に授業を行った。必要な事や必ず習得してほしいことは、繰り返し授業の冒頭で説明するようにした。また、提出物のは菅らずコメントをいれ、学んでほしい内容や学習してほしいところがわかるようにした。その結果、学生の授業評価の内容には特に改善を求める内容は記入されていなかった。履修学生全員が概ね目標達成でき単位習得できた。

「卒業研究Ⅱ」では、学生の主体性を引き出すように指導したが、スケジュール管理がうまくいかない学生もいた。学生の理解しやすい方法の説明や指導方法に個別に変化させ指導を行った。全員目標達成できた。

「老年看護学Ⅰ」「老年看護学実習Ⅱ」「統合看護学（老年領域）」では担当学生の特性に合わせ、実習してから記録で整理する学生と、実習する前にまずは整理した方がよい学生に合わせて、指導方法を工夫した。自宅に帰ると指導内容を忘れてしまうという学生には、できるだけ内容を実習記録に記述して残すように指導した。モチベーションやできていることも明確にわかるように、できていることには、◎をつけた。記録の中にできていたこともコメントを残すようにした。実習病院との調整では、様々な実習ができるように担当患者の選定や実習内容の選定を行うようにした。不備がある場合や打ち合わせと違う場合などは、その都度担当者や病院と話し合い調整するようにした。履修学生は概ね目標達成でき、全員が単位習得できた。

「成人看護学実習Ⅰ急性期」では、実習開始後のさらに実習病棟での調整や患者選定などにも関わり、術後患者の急性期～亜急性期の患者の看護の理解について務めた。患者の目まぐるしく変化する状態や治療やケアについていけるように補足説明や学習指導を行い目標達できるように支援した。

5. 今後の目標

シラバス考案の担当であったが、学生が受け身とならないように、できるだけ能動的に考えていける授業を行いたいと考えている。座学だけですべての看護は学べないが、基本的な知識などはおろそかにせずきちんと理解や暗記をし、その学んだことを生かして実習や今後の就労に自信をもってつながるように考え授業設計していきたい。特に就労後の学生の働きやすさや看護の面白さにつながることでキャリアの分断をさせず、長い目で学生が、自分でキャリア形成していける基礎づくりをしていけるような教育ができるようにして行きたい。

失敗を恐れずチャレンジできるように、特に実習中は個人個人に声かけしながらほめるということも含め指導し、自身の困りごとやそれを解決できるように助言するなどし、心理面のサポートも行っていきたいと考える。すべての講義がつながり体系だって学修できるように学生の終業年限やこれまでの授業内容について、既習授業の教員とも連携をこれまで通り取りながら学修できるように支援していきたいと考えている。

既存の学習方法以外の学習に方法についても創意工夫し、外部講師への依頼なども行い、学生が学びやす

- ・ 必要に応じて根拠資料を添付（シラバス、授業評価アンケート等）

授業計画

2023年度老年看護援助論演習 授業計画 3年 前期 必修科目									
木曜日 3.4限目 クラシルームコード:									
※授業時は、授業は合同、1組・2組のクラス別、の形態で行います。時間・教室に注意してください。									
回数	日付	クラス	時間	教室	シラバス項目	内容	形式	提出物	担当
第1回	4月6日 (木)	1組	3限	2401	老年看護援助論演習の学び方 高齢者看護の展開(1) ゴードンの機能的健康パターンの枠組 み理解	老年看護学援助論授業計画・評価方法 ベアワークの方法 高齢者の加齢変化 看護記録用紙の種類と使い方	講義 ベアワーク	なし	臼井 高橋
		2組	4限	2402					
第2回	4月13日 (木)	1組	3限	2401	看護過程の展開(2) パターン1健康管理 看護の方向性	ゴードン機能的健康パターンの枠組み理解 看護過程の展開 p.408～423 施設入所のアルツハイマー型認知症の高齢者 P148 P300～301	講義 ベアワーク	なし	高橋
		2組	4限	2402					
第3回	4月20日 (木)	1組	3限	2401	看護過程の展開(3) 事例を使って看護展開を学ぶ パターン2栄養代謝	事例で展開 p.408～423 施設入所のアルツハイマー型認知症の高齢者 P148 P300～301	講義 ベアワーク	なし	高橋
		2組	4限	2402					
第4回	4月27日 (木)	1組	3限	2401	看護過程の展開(4) 事例を使って看護展開を学ぶ パターン3 排泄	事例で展開 p.408～423 施設入所のアルツハイマー型認知症の高齢者 P148 P300～302	講義 ベアワーク	授業終了時 パターン 1～3を ベアのうち 1部のみ提出	高橋
		2組	4限	2402					
第5回	5月11日 (木)	1組	3限	2401	提出物の振り返り 看護過程の展開(5) 事例を使って看護展開を学ぶ パターン4 活動	事例で展開 p.408～423 施設入所のアルツハイマー型認知症の高齢者 P148 P300～303	講義 ベアワーク	なし	高橋
		2組	4限	2402					
第6回	5月18日 (金)	1組	3限	2401	看護過程の展開(6) 事例を使って看護展開を学ぶ パターン5 活動	事例で展開 p.408～423 施設入所のアルツハイマー型認知症の高齢者 P148 P300～304	講義 ベアワーク	なし	高橋
		2組	4限	2402					
第7回	5月25日 (木)	1組	3限	2401	看護過程の展開(7) 事例を使って看護展開を学ぶ パターン5～7 休息・認知・自己知覚	事例で展開 p.408～423 施設入所のアルツハイマー型認知症の高齢者 P148 P300～305	講義 ベアワーク	授業終了時 パターン 4～7を ベアのうち 1部のみ提出	高橋
		2組	4限	2402					
第8回	6月1日(木)	1組	3限	2401	提出物の振り返り 看護過程の展開(8) 事例を使って看護展開を学ぶ パターン8～9 役割・セクシャリティ	事例で展開 p.408～423 施設入所のアルツハイマー型認知症の高齢者 P148 P300～306	講義 ベアワーク	なし	高橋
		2組	4限	2402					
第9回	6月8日 (木)	1組	3限	2401	看護過程の展開(9) 事例を使って看護展開を学ぶ パターン10～11コーピング・価値信念	事例で展開 p.408～423 施設入所のアルツハイマー型認知症の高齢者 P148 P300～307	講義 ベアワーク	授業終了時 パターン 8～11 ベアのうち 1部のみ提出	高橋
		2組	4限	2402					
第10回	6月15日 (木)	合同	3限	2401	提出物の振り返り 健康逸脱からの回復を促す看護(1) 退院支援	高齢者の地域での生活への影響、医療について	講義 ベアワーク	退院支援 レポート 提出日指定 あり	高橋
第11回			4限	2402	看護過程の展開(10) 関連図 看護問題の抽出と目標設定	事例で展開 p.408～423 施設入所のアルツハイマー型認知症の高齢者 P148 P300～307	講義 ベアワーク	なし	高橋
第12回	6月22日 (木)	合同	3限	2401	看護過程の展開(11) 看護計画 看護手順 看護の評価方法	事例で展開 p.408～423 施設入所のアルツハイマー型認知症の高齢者 P148 P300～307	講義 ベアワーク	なし	高橋
第13回			4限	2402	看護過程の展開(12) 看護計画 看護手順 看護の評価方法		講義 ベアワーク	なし	高橋
第14回	6月29日 (木)	合同	3限	2401	看護過程の展開(13) 経過記録の書き方 看護サマリーの書き方	事例で展開 p.408～423 施設入所のアルツハイマー型認知症の高齢者 P148 P300～307	講義 ベアワーク	なし	速水
第15回			4限	2402	健康逸脱からの回復を促す看護(2) 認知症看護の実践	認知症 P148 P296～316 認知症サポーター養成講座	講義	認知症看護 レポート 提出日指定 あり	臼井 外部講師

定期試験なし
 課題提出「脳梗塞片麻痺高齢者」事例の看護課程の展開を提出 2022年7月10日(月)13時締め切り 配点70点
 授業途中の提出物:10点 小レポート:退院支援10点 認知症看護10点 評価表 は授業で配布します

学部・学科	保健医療学部・看護学科	氏名	西出 順子
1. 教育の責任			
1. 保健医療学部看護学科における教育 精神看護学概論、精神看護援助論、精神看護援助論演習、精神看護学実習、統合看護学実習、卒業研究Ⅱ 2. 大学院看護学研究科における教育 精神看護学特論Ⅰ（日本の精神医療のノーマライゼーションの実際、精神障害者と家族から見た地域精神医療サービスの制度と課題）、精神看護学特論Ⅱ（心理機能評価、身体機能評価、発達課題評価） 3. 学生のアドバイザーとして、1年次生2名、2年次生2名、3年次生2名、4年次以上5名を担当した。 4. 教務部会メンバーとして、教務に関する課題を検討実施した。 5. 入学前教育企画運営に携わった。			
2. 教育の理念・目的			
看護の対象に積極的に関心を寄せ、共感的理解のもと対象の意思や考えを第一に尊重することを基盤にした関わりの中で、対象が生きることへのイニシアティブを取り戻し、人生を豊かにしていけるようサポートするケア実践者を育成する。 学生と教員の関係性の取り方も患者―看護師関係の模擬体験に通ずると考える。学生が脅かされず意思や考えを尊重され、学ぶことに主導権を持てる体験を大切に。また、学生の理解（情報の把握）においては、育成過程やその場の心理状態の影響を受け様々であり、誰しもが一様に講義内容等を理解できるものではないことを前提とし、生物学的・心理学的特性を踏まえ、感情の喚起や近しい素材等を提供しながら注意・関心を向け、思考することに繋げるよう努める。学生の個別性を考えた指導の模索と努力を怠らない。			
3. 教育の方法			
<学部> 目に見えない精神の機能や心理をイメージし、理解していくツールとして複数の理論の概念枠組みを使用する。対象の心理や行動を理解する概念枠組みとして、フロイトの局所論・構造論・発達論、自我防衛機制、エリクソンの発達論、前田重治の適応論、また人との関係性からみる対象理解として、コフートの理論、土居建郎の甘えの理論エリクソンの発達論等をできる限り具体的に例を挙げ、時にはアニメキャラクター等と関連付けて解説し、関心を喚起するように心がけている。これらの概念枠組みは精神看護学概論・精神看護援助論・精神看護学演習で状況を変えて繰り返し活用することを通し、臨地実習に備えている。 精神看護学のアップデートについては、医学書院の雑誌「精神看護」と精神看護関連の研究を取り入れ最新のケア情報を紹介している。 精神看護学概論・精神看護援助論は主に講義形式で進めているが、精神障害や疾患の理解の上に立ったケアというよりも、精神機能のコントロールが難しくなり生活者として生きづらさを抱える人という考え方を大切に、対象理解と理解の上に立ったコミュニケーションの重要性を事例とともに説明する。ツールとして、ドキュメンタリー映画の一部や「べてるの家」のDVDを用い、当事者の語りを大切にする。普通では理解しづらい幻覚妄想については『幻聴・妄想かるた』を用い、学生自身の体験と近しさの実感を通して、精神障害者に対する特別意識の軽減をはかる。また、理解の成果を確認するために授業ごとにノートをもとめ提出してもらい、学生の関心の向くところや理解力、まとめる能力を把握している。ノートはコメントをつけて返却しているが、コメントの内容は助言や感想を含むが、学生の気持ちを低下させようなネガティブな内容は記述しないように心がけている。 精神看護援助論演習においては、教員の模範的解説に続き、グループワークで看護過程をすすめている。看護の対象の精神状態のアセスメントを強化すべく、事例の状態と精神状態を示す用語とをつなげ、生活にどのように影響するのかまでの解説をグループワークの内容の質に応じて入れた。グループワークの際に、教員がグループ間を回り、学生がグループに参加できるようにファシリテートの役割を担っている。成果物に対しては、不足する内容については、自己学習するポイントを提示しながらすべてにコメントを入れて返却している。臨地実習については、学生のモチベーションを低下させないように、学生のセンスを尊重し、行動し体験を通した振り返りを大事にする。 アドバイザー面接・他個人面接では、状況に応じてアドバイスマード、カウンセリングモード、教育的モードを使い分けて対応する。 <大学院> 最新の研究論文や理論を活用し、時には学生にも調べてもらい、学生の臨床体験や臨床活動と関連付けながら対話方式ですすめる。			
4. 教育の成果			
精神看護学概論では4名が再試験対象となったが、最終的に合格となった。精神看護援助論では5名が再試験対象となりレポート課題を課したが、1名が提出せず再履修となった。精神看護援助論演習においては全員合格した。授業評価では、授業ノートに関する負担感に関する内容が多く聞かれた。授業内容を毎回まとめて調べ、考察する課題を課していたが、1回の授業枠の自学時間を有効に活用できず、提出最後にまとめて行う学生が多く、他授業の課題も重なりもあり、負担感を強くしたと考える。来年度は、授業ノートではなく、授業日にまとめと考察を提出する形に変えることを考える。3年生の領域実習では、精神状態のアセスメントや心理アセスメントにおいては、助言を受けながら患者理解を深め関わり、看護援助の入り口には立てたと捉えているが、コミュニケーションの基本の共感的な応答が不足する場面も多く、演習による訓練が必要と考える。何よりも実習を通して患者理解を深め、関わる中で精神障害者に対する偏見をやわらげ、倫理観を養うことはできた。			

5. 今後の目標

- ・精神の生物学的側面・心理学側面の知識の実践への汎用性を高める。
- ・自学自習時間における課題を検討する：授業ノート課題からミニッツノートへの変更し、テーマを絞りレポート課題とすることで学生の負担感の軽減をはかるとともに効果的な活用を検討する。
- ・看護的コミュニケーションにおいて「共感」「受容」「自己一致」に関する演習を行い、実習でのコミュニケーション力の向上をはかる。

・ 必要に応じて根拠資料を添付（シラバス、授業評価アンケート等）

<参加した研修会など>

日本精神保健看護学会第33回学術集会（Zoom）/複雑性PTSDに対するコンパッション・フォーカスト・セラピー研修会/日本看護研究学会 第49回学術集会（Zoom）/日本精神分析的自己心理学協会 「それぞれの領域における共感」（Zoom）/霧心館主宰 KJ法ワークショップ

ティーティングポートフォリオ

学部・学科	保健医療学部看護学科	氏名	林 文子
1. 教育の責任			
私は本学、奈良学園大学保健医療学部看護学科の教員であり、小児看護における授業、実習を担当している。着任後7年目の担当は次の内容である。 小児看護援助論（看護2年必修）小児看護実習（看護3年必修）小児看護援助論演習（看護3年必修）統合看護学実習（4年必修） 卒業研究（4年・必修）ターミナルケア論（4年選択 全8回のうち2回担当）。各授業のシラバスは大学 WEB ポータル上で本学学生並びに教職員に公開されている。			
2. 教育の理念・目的			
私の授業は、看護学部2・3年次の小児看護にかかわる科目が多いことである。2・3年次は、1年次に培った基礎看護学の知識と技術を土台とし、各専門領域の知識や技術を積み上げるよう学習を深め、看護に対する幅広い能力を身に付け、医療に対する倫理観を深めるべく学習することが重要である。小児看護学においては、学生にとって初めて学習する内容であり、対象となる子どもについて、少子高齢化、多様化する育児環境、子どもを取り巻く社会を検討していくにあたり、学生自身に子どもとの関わりを持つ体験が少ないことから、子どもの健全な成長発達と生活のイメージがわからない学生も多い。しかし小児医療の進歩や救命率の上昇、様々な養育環境により子どもの疾病構造、健康問題は変化しており、子どもと家族の健康的な生活を支える小児看護の社会的ニーズは高い。そのため小児看護学を学ぶ学生に対して、専門的知識と技術、倫理観について、学習を深めよう、大学の教育理念に基づき、真摯に教育に取り組まなければならないと考える。			
担当している講義のうち小児看護援助論について述べる。この科目は子どもの健全な成長発達と生活を支える看護について様々な健康レベルにある子どもと家族の抱える課題をとらえ、看護援助の必要性を見出すアセスメントの基本的な理解が重要である。小児看護学概論で学習した子どもの基本的な発達と生活習慣、あるいは保健行動の促進に携わる小児看護の機能と役割についての基本的知識を土壌に、在宅療養や入院生活における小児の健康な生活のための看護を習得する科目である。授業では、療養生活が子どもと家族にもたらす影響を検討し、小児の生活援助の原則を①安全・安楽であること②病期・発達段階に応じた生活③家庭生活に近い環境を維持することとし、援助方法を学習していく。特にイメージしにくい子どもの特性や生活を踏まえて学習できるように、資料やレジメなどの要所で図を使って説明したり、援助場面の一部をDVDによる動画の活用を取り入れている。また乳児期から思春期まで小児の発達段階の幅は広いが、各授業の目的・内容に相応する発達段階の患児の例を用いて援助の実践方法を考え、各時期の課題をと捉えやすくしている。授業中に課題を出し、グループワークを一回、内容によっては2回取り入れ、検討できるようにしている。グループワーク中は教員が周り、話し合いの進行を助言したり、質問に答えたりして、学習が活発化されるようにしている。また学生の学び合いの良い点をクラス全体で共有したり、学生の疑問についても取り上げ、その授業内で解決できるようにしたり、次の授業の学習課題につなげるような工夫をしている。グループワークではなく個人の課題の取り組みは、クラスルームを活用し評価するなど、学生とのやり取りをできるだけ持てるようにしている。			
学生はイメージしにくかった子ども観と子どもへの援助に関心を持ちながら講義を聞き、グループワークの自由で活発な発言をしながら参加することができた。またグループワークでは他人の意見や考えを聞き、どのような援助が子どもと家族の支援になるのか考え、教員への質問ややり取りも交え、クラスでの共有やまとめなどによって、学習の成果を高めることができた。 またその日の学習目標と課題について、グループワークを通して自らできたことやよかったと感じた経験は、次への学習につながっていた。			
5. 今後の目標			
今後、知識・考える力の定着を目指し、学生の肯定的なコメントだけではなく、グループワークでも力の発揮がうまくいかず学習成果が低い学生も存在するため、講義ごとに質問や自己評価を十分に行い、成果が低い学生への個別の働きかけをもっと行っていきたい。また確認テストの実施レポート課題、客観的な評価による学習成果の確認をしていきたい。学習内容が、ハンズ・オンではなくマインズ・オンになるよう、どのようにすれば、〔わかった〕と感じとり学習できるのか考え工夫していきたい。			
・ 必要に応じて根拠資料を添付（シラバス、授業評価アンケート等）			
授業の感想の一例 ・ グループワークを通して有意義に理解を深めることができた。 ・ 自分の意見だけではなく人の違った意見をきくことはとても学習になった。 ・ 自分で考えることができた ・ 小児について知識を身に付けてもっと考えられるようにしたい ・ 講義の話さきだけでなく、なぜ？と考えながら講義が聞けた。 ・ 問題を解いてその解説をききながら、また考えていくことでとても分かった ・ これからも講義で問題（課題）を取り入れてほしい ・ ワークシートを使って学習するのがわかりやすい などであった。			

学部・学科	保健医療学部・看護学科	氏名	山本 真樹子
1. 教育の責任			
<担当授業科目> 母性看護学実習、統合看護実習、卒業研究Ⅱ 助産診断・技術学演習Ⅰ、地域母子保健、助産学実習Ⅰ～Ⅳ ラーニングスキルズ <各種学生支援> アドバイザー、進路・就職支援、オープンキャンパス			
2. 教育の理念・目的			
・自らの教育理念と目的 看護職者は、生涯学び続けていく者である。専門的な能力を維持し、高めていくためにも自ら専門的な技術、知識を身につけていく努力が求められる。同時に高い倫理性が求められることと多様な背景の対象者に関わるため、幅広い教養と多角的な視点、自らを客観的に捉える能力が求められる。また、看護職者自身が心身ともに健康でなければ対象者に対してケアを行うことはできないと考えるため、自らの心身の健康維持・増進ができる日常生活を送ることも看護職者にとって重要なことである。以上から、自ら考え学び続ける力、健康管理・時間管理を含むセルフケア能力を養うことができるようにと考えている。 ・価値観・信念 聖書の価値観を土台とし、一人ひとりの学生の成長を“信頼”することとその学生の背景も含めて理解することや受容に努めることを大切にしたいと考えている。 また、母性看護学・助産学が専門であることから、男女問わずに、自らの心身を大事にすることを伝えることも心がけている。			
3. 教育の方法			
・学生との接し方 教育も、女性が母親になっていく過程と同様に受容されていると感じることができることが大切だと考える。こちらから歩みよること、それぞれの学生の個性を尊重しつつ関わること、自己表現できる機会を設けていくことを大事にしている。 特にアドバイザーとして担当している学生に対しては、定期的に1年に2回面談連絡を行い困っていることはないかを確認するようにしている。ただ大学生でもあるため、主体性を尊重し、見守りつつ、必要であれば、面談を行う方法としている。また、看護だけでなく様々な分野の読書をするように勧めている。 ・授業の工夫（授業の方法、内容等） 専門的な内容を伝える時に、学生がイメージしやすいように、実際の臨床での経験（ブライバシー保護を守りながら、学びに即した事例として提示したり、私自身の失敗例を話すこと、また今まで関わった学生のケア実践を例えとして紹介するなどを含めて）伝えるように努めている。 ・FD/SD活動等にかかわる内外の研修会への参加 本学でのFD/SD研修会 各都道府県の助産師会の研修；京都府助産師会 第1回定期研修会「睡眠ケア最前線」2023年7月15日、第2回定期研修会「助産魂に火をつけよう！助産哲学を語り合う」2024年2月10日 大阪府看護協会：「助産師の力が求められているブレコンセプションケアを理解しよう」の受講 2023年12月16日 全国助産師教育協議会：第16回近畿地区助産師学生交流会（2023年4月22日）、助産政策論教育方法オンラインセミナーイーラーニングのみの受講（2024年1月）（当日は業務有線不参加）、 看護薬理学カンファレンス2023in東京（2023年6月18日）、第37回奈良県母性衛生学会学術集会（2023年7月29日）、第64回日本母性衛生学会学術集会の参加（10月13日）、オンラインセミナー（オンデマンド配信）受講（2023年10月16日～11月20日） 日本看護協会インターネット配信研修：「周産期における医療安全と助産記録」「臨床薬理（妊娠と薬）」「臨床推論につなげるためのフィジカルアセスメント 脳神経編」「臨床推論につなげるためのフィジカルアセスメント 呼吸・循環編」「妊娠と糖尿病」「臨床病態生理」（CLoCMiPレベルⅢ認証推薦のための必修研修）「院内助産・助産師外来ガイドライン2018」「院内助産における産婦主体の助産ケア提供～フリースタイル分娩の介助」（アドバンス助産師[更新]選択研修）「急変と予測と救命救急場面の対応（JNAラダーレベルⅢ到達のための研修）			
4. 教育の成果			
・助産学実習において、日本看護協会インターネット配信研修「臨床薬理（妊娠と薬）」の学びを生かして、学生が受け持ち妊産婦のアセスメントに役立てることができた。教科書にこの研修での学びを加えて伝えることで学生の理解が深まっていた。同研修の「院内助産における産婦主体の助産ケア提供～フリースタイル分娩の介助」での学びを実習直前の演習や、助産学実習での学生とのリフレクションに生かし、学生からも理解が深まったという評価があった。			
5. 今後の目標			
短期的目標：2023年度に受講したCLoCMiPレベルⅢ認証申請のための必須研修などの学びを講義・演習、実習に還元していく。全国助産師協議会のファーストステージ研修助産師教育課程を受講し、助産師教育の教育方法や評価方法について学び、今後の講義・演習・実習に生かす。 長期的目標：アドバイザーとして関わる各学年の学生に対して、個々の学生の特徴に応じて、自らキャリアについて考え、主体的に時間管理を実践できるような関わりを検討し実践する。また、実習で短期的に関わる学生についても、レディネスを踏まえて、学生自らがどのように成長したいかを考え、その実践ができるようなサポートを検討し、実践する。			
・ 必要に応じて根拠資料を添付（シラバス、授業評価アンケート等）			

ティーディングポートフォリオ			
学部・学科	保健医療学部 看護学科	氏名	井上 理子
1. 教育の責任			
1) 担当授業 (1) 看護技術の基礎Ⅰ：講義および演習 (2) 看護技術の基礎Ⅱ：講義および演習 (3) 卒業研究Ⅱ：文献検索から分析課程、論文・抄録作成までを計画的に指導 2) 担当実習 (1) 基礎看護学実習Ⅰ：1年生が医療者の視点で医療現場を捉えられるように助言・指導をしている (2) 基礎看護学実習Ⅱ：初めて患者を受け持つなかで、知識を基盤として看護を展開できるように助言・指導している (3) 統合実習：学生自身の学びたいテーマに基づき、領域 3) 学習支援 (1) キャリア委員会：国家試験対策			
2. 教育の理念・目的			
1) 教育理念 自律した専門職者として社会で活躍できるように、詰め込み型教育でなく、学生の発信を主軸とした問題解決型教育を実践する。 2) 信念 学生のモデルになれるよう、教育者である自分自身の自己研鑽を怠らず、貪欲に学び、社会貢献に努める。 知識の積み上げだけでなく、他者を認め敬える人間となれるよう、日常の人間関係を振り返りながら人としての質を向上させる。			
3. 教育の方法			
1) 学生との接し方 学生の成長を手助けするうえで、必要なことは伝えてられるよう、学生との適度な距離感を維持している。 学生の家族および生活背景が、学習に影響を与えていることもあるため、心配事について尋ね、話せる環境づくりをしている。 2) 授業の工夫 答えを求めるだけでなく、思考力を高められるよう、学生から発せられた言葉を用いて、説明するように心がけている。 学生は、看護において初学者であることから、これまでの生活経験から可能な限り想像できる内容を基に授業の導入を組み立てている。 講義における集中力の継続可能な時間を考慮し、積極的にグループワークや学生の発表の時間を組み込ませている。 3) 研修会の参加 学内の研修は、積極的に参加している。学外では、対話推進の活動に参加している。 4) 専門分野の成長 精神医療に関して、日本だけでなく海外を含めた歴史や現状を基に、現代の日本の進むべき方向性を見出すべく研究を行っている。 生涯教育、特別支援教育など、医療・看護の枠だけに留まらないように、大学院博士後期課程では発達教育学を学んでいる。			
4. 教育の成果			
初めて基礎看護学の授業を担当した。これまで精神看護学の授業を担当していたことから、授業資料や講義内容に課題が多いと自覚している。今後も引き続き、資料作成や授業内容の組み立てをブラッシュアップをしていく。 看護師になることに迷いが生じている学生に対して、成績だけでなく、看護師として「他者に関心をもてるか」「他者を認め敬えるか」といったことも評価することで、学生自身がそれまで自覚していなかった能力に気づき、改めて看護師になる目標を持つことができた。			
5. 今後の目標			
1) 長期目標 対象者にとって有用であり、社会に貢献できる看護専門職者をできる教育者になる。 2) 短期目標 自己研鑽のために自らも学習者となり、教育学の教授の指導を受けながら研究論文を完成させる。 精神医療の改革について活動及び研究を行っている方々と交流し、専門的知識を向上させる。			

学部・学科	保健医療学部看護学科	氏名	中野慶子
1. 教育の責任			
・ラーニングスキルズ：第4回から第15回までを担当する。医療に関する科学的情報や根拠を批判的にとらえ、正しい理解と考察、文章作成につなげる授業を行う。 ・地域・在宅援助論：第1回から第3回を担当し、家族支援の重要性について授業を行う。第27回から第30回を担当し、認知症事例を通して支援制度の法令法規と多職種連携で関わる社会資源について授業を提供する。また、看護実践の多様な場を紹介し、看護の在り方を考察する機会を設ける。担当外の授業について、外部講師との調整を行い、出欠確認や提出物整理、成績の取りまとめなどの授業運営の援助を行う。 ・地域・在宅援助論演習Ⅰ：第2回、第3回を担当し、パーキンソン病を患う対象者の看護展開をグループワーク演習を行う。第11回から14回はALSの対象者理解とグループワーク演習の補助、文字盤を使ったコミュニケーション方法の演習授業を行う。第15回は地域特性を理解したケアシステム構築を考える授業を行う。担当外の授業について、外部講師との調整を行い、出欠確認や提出物整理、成績の取りまとめなどの授業運営の援助を行う。 ・地域・在宅援助論演習Ⅱ：第1回を担当し地域ケアシステムの理解の上で、エコマップの作成について授業を行う。担当外の授業について、外部講師との調整を行い、出欠確認や提出物整理、成績の取りまとめなどの授業運営の援助を行う。 ・地域・在宅看護学実習：実習要項に沿って施設との調整、臨地での学生指導、学内での学習支援、成績評価を行う。 ・卒業研究：学生の関心に対して、文献レビューを卒業論文として形にしていく学修の支援をする。 ・アドバイザー：担当学生12名と面談し、日々の学修支援にあたる。問題把握の際は、学生生活を通して他教員と共有しながら支援を行う。 ・各種委員会活動：学生生活として、学生の修学状況の集約と共有、組織として学生の大学生活の改善を図る。実習委員会として、効果的な実習機会の提供となるよう、各所との情報共有と対応を行う。			
2. 教育の理念・目的			
・看護教育を提供する上で、高度人材育成と地域貢献を大きな目標としている。高度人材育成は、看護職を多様な人々の生き方を支える医療専門家の一つと位置付け、多様な人の生活に適時適切にケアを提供する人材を育てることと認識している。また、それらの人材が地域に根ざした形のケア提供できるよう、人と地域の理解を深める教育提供が必要と考える。 ・学生の多様な背景を理解しつつ、彼らの主体的な考えや学びを引き出すことが教員の役割と考える。学生自身が自分を信じていることができる学び体験の提供が、教育として大切である。			
3. 教育の方法			
・学生への接し方：学生の発言や関心をもとに、それらの話題から考えられるよう接する。学生自身、間違えることや注目されることを避ける傾向があるため、自身の考えを表現することは、他者との違いを認識でき、多角的に物事を捉えることができると伝えている。 ・授業の工夫：学生同士や学生と教員のコミュニケーションの機会を多く取るよう、グループワーク演習や発表機会を多く設けている。少人数での議論の場を設けることで、安全性を保ちながら、一人一人の発言機会を多くする工夫をしている。 ・FD/SD研修：学内で実施されるFD研修に参加している。 ・自らの専門分野の成長：今年度より博士課程に入学し、研究手法を学びながら教育に還元していく。			
4. 教育の成果			
・ラーニングスキルズの担当学生全員が研究室を訪ね、文献検索や文章作成に関して質問してきた。自身の関心をより深めるために、教員と議論しながら、主張を論理的に文章化する作業を主体的に取り組んでいた。 ・議論する前提の知識確認が必要である。学生の習熟度に合わせた議論内容を心がける。			
5. 今後の目標			
・長期目標：地域・在宅看護学領域の教員として、地域で提供される看護ケアの多様な在り方を創造できる教育に寄与したい。 ・短期目標：地域で生活する人を理解する授業と、地域を形成する社会資源を理解する授業を提供する。これらの理解をもとに、看護として生活をどのように支えていくことができるか、議論する場を多く作っていく。			

・ 必要に応じて根拠資料を添付（シラバス，授業評価アンケート等）

- ・ FD研修参加（2023年5月24日、2023年8月2日）
- ・ 特定非営利活動法人 アットリンク奈良主催、性暴力被害者支援員養成講座 応用編（全6回）を受講。
- ・ 2023年度アルコール・薬物依存関連学会合同学術総会にてポスター発表実施。

学部・学科	保健医療学部・看護学科	氏名	速水 裕子
1. 教育の責任			
令和5年度 授業の担当：1年次：ラーニングスキルズⅠ 2年次：成人老年看護援助論Ⅱ 3年次：老年看護学援助論演習、老年看護学実習Ⅰ、老年看護学実習Ⅱ 4年次：統合看護学実習、卒業研究Ⅱ カリキュラム変更の過渡期であるので、領域会議に参加しながら、新しいカリキュラムが滞りなく進行していくよう、既存のカリキュラムもよりよく改善していけるよう尽力した。アドバイザーについては、11名を担当し、面談等を行いながら、適宜学生支援をしていた。特に4年生については卒論を速やかに書き終え、国家試験が合格するよう力を尽くした。が広報委員として、オープンキャンパスにて大学の魅力が来場者に伝わるよう、知りたいことを知りえて、満足して帰って頂けるよう、また、各教員、学生に負担がかからないよう運営に配慮した。			
2. 教育の理念・目的			
学生が主体的に学問を追究する姿勢となるよう、学問を学ぶ喜びが堪能できるよう、大学での学び方の要点が伝えられるように力を尽くした。社会に出てからも、生涯的に継続して学習していける素養を育めるよう意識して、授業を展開した。就職してからも、問題解決方法を論理的に提案していけるよう、その土台となる教育という点を意識して授業内容や実習内容を考えている。			
3. 教育の方法			
1.学生との接し方 修士課程で学んだFeminist Pedagogyの教授法を意識し、教員と学生が強者、弱者という関係にならないよう、人として対等な関係というところを意識して関係づくりをしている。それでも成績をつける存在であることも意識し、適度な距離を保ちながら、学生に寄り添う姿勢を保てるよう努力している。 2.授業での工夫 学生が患者を全人的にとらえ、多角的視点から人を理解し、看護として大事な共感的姿勢を学べるよう、患者や高齢施設利用者などの気持ちを推し量れるように、授業を組み立てている。 3.実習での工夫 学生の主体的な考えや強みを活かしていけるよう、その学生の強みを活かした看護展開となり、自身と満足感を得られるよう、実習を組み立てている。自身の老年領域の魅力が伝えられ、さらなる高齢化社会にやりがいをもって活躍できる人材となることを意識しながら、1人1人の学生を支援している。 学内のFD研修会には積極的に参加し、議論に入って、大学の組織体制や教育内容が改善していけるよう尽力している。			
4. 教育の成果			
授業のフィードバックでは、どうしても自身の意図したことが獲得できている者がある反面、そうでない者もいるため、授業の意図や理解の度合いを確認しながら進めていけるよう、今後改善していきたい。まだ、本学1年目であり、学生の年次を経ての成長の確認ができていないが、全体的に文章を書くことが苦手な学生が多いため、実習でより記録物について筆が進むよう、授業で例などを具体的に示し、書く力を早くから養えるよう援助していきたい。			
5. 今後の目標			
主体的に学ぶ姿勢や学問を学ぶ喜びが伝えられるよう、授業や実習でも尽力し、一人ひとりの学生の強みや個性を最大限に活かし、着実に成長していけるよう、日々1日1日の教育を大事にしていきたい。就職してからも、生涯的に学習や論理的に考えるスキルが社会でどのように役立つかも伝えられるように工夫したい。学生の多様性にも配慮し、合理的配慮学生のペースに合わせながら、教育方法の多様性についても検討していきたい。			

学部・学科	保健医療学部 看護学科	氏名	松居 典子
1. 教育の責任			
1) 主に母性・助産学領域で授業および演習科目と実習を担当した。 【担当科目】母性看護援助論、母性看護援助論演習、助産診断・技術学Ⅲ、助産診断・技術学演習Ⅱ、卒業研究Ⅱ、母性看護学実習、統合看護学実習、助産学実習 2) 看護学科広報部に所属し、オープンキャンパスの学生配置や学生連絡などを担当した。その他、部会メンバーと共に大学の認知度を上げるため工夫や取り組みを行った。 【担当部会】看護学科広報部会			
2. 教育の理念・目的			
学生自身が興味を持ち、主体的に学べるように授業をすすめていきたいと考えている。 授業や授業資料から学習内容について学生が興味を持ちさらに、自己学習を深めていける機会となるようにしていきたい。 学生に問題定義できるように、関連情報に興味と問題意識を持ち、自身も学習を深めたい。 また、学生相互の意見や考え方も大切にすることで、より学びが深められると考えている。			
3. 教育の方法			
どの学生にも不利益のないようにすること、公平に接することなどを念頭に学生と接するように努めている。続くコロナの影響下で、やむを得ずオンラインで参加する学生や、動画を事後に視聴する学生もあるが、そのような状況が学生の不利益とならないように、オンラインでも同等の学習成果が得られるように工夫し、授業計画を行っている。講義形式の授業では、プレゼンテーションのスライドを準備し学生自身で書き込みをしてもらうなどし、授業内容を確認しながら進めている。また、学生自身で考え、学びを深めてもらうためにグループ学習も適宜取り入れている。オンライン形式の授業では、事前に資料を提示して学生が準備して授業に参加できるようにしている。学生からの質問は、グーグルクラスルームやメールなどでも適宜受け、学生の学びの妨げにならないようできるだけ早く、わかりやすく返答するように心がけている。演習の授業については、正しい方法、現実に則した方法で演習をするように心がけ、学生の学びを混乱させないように注意している。実習では、学生に多くの学びの場が得られるようにすること、学生と実習指導者がスムーズにコミュニケーションをとれるようにすることを心がけている。また、実習場面で、より学習を広げ、深めてもらえるような指導を行えるようにと考えている。 FD/SDに関する研修会については学内・学外で行われるものに参加するように努めている。母性分野の研修会についても、できるだけ参加し、いろいろな知識を得るように努力している。			
4. 教育の成果			
授業時に得た学生のコメントなどから、授業内容について、興味を深め理解を得られていると考えられる。 しかし、学習成果が十分でないものもあり、年度ごとの学生の特徴も理解し授業計画、資料、説明などに反映する必要がある。			
5. 今後の目標			
年度ごとに学生の特徴も違うため、対象学生の特性を十分に把握する必要がある。特性を把握したうえでどのような指導が理解につながるかを考え授業計画や資料の作成、学生への説明につなげていきたい。また、授業終了後速やかに学生の理解状況を判断し、適宜フィードバックを行うことで、効果的な授業となるように心がけたい。			
・ 必要に応じて根拠資料を添付（シラバス、授業評価アンケート等）			



学部・学科	保健医療学部 看護学科	氏名	松浦 尚子
1. 教育の責任			
1 令和5年度、保健医療学部看護学科の基礎看護学領域で、以下の授業を担当した。 (1 年次生) 看護技術の基礎Ⅰ、基礎看護学実習Ⅰ (2 年次生) 看護技術の基礎Ⅱ、看護実践プロセスの基盤Ⅰ、基礎看護学実習Ⅱ、公衆衛生看護学Ⅱ (学校保健) (3 年次生) 公衆衛生看護学Ⅱ (学校保健) (4 年次生) 卒業研究Ⅱ、公衆衛生看護学診断演習、統合看護学実習、公衆衛生看護学実習Ⅱ 2 アドバイザーとして、1 年次生2名、2 年次生2 名、3 年次生2名、4 年次生以上5名 の学習生活支援を行った。 3 校務分掌では学生生活を担当した。			
2. 教育の理念・目的			
私は、本学の教育活動において、以下の3点を重視している。 1) 看護が楽しいと思えるように、授業展開、実習を工夫する。 2) 学生の個々の能力が引き出せるよう工夫する。 3) 主体的な学修ができる学生を育てる。			
3. 教育の方法			
上述の教育理念を達成するため、講義、演習では、すぐに答えを伝えるのではなく、「なぜ？」と問いかけ根拠を考えさせるようにしている。学生は今までの教育で、教えてもらうことが当たり前となっているため、「教えてくれない」と訴えられることもあるが、「なぜ？」と問いかけることにより、看護の本質を考えられるようになり、その考えたことを言語化することにより、考える力、相手に伝える力が育っていく。そして、毎回授業・演習の後には振り返りの課題を出し、学びの言語化をしている。 実習では、「なぜ？」と問いかけながらも、その時にしか学べないことが多々あるため、すぐに答えが導き出せるように工夫し、看護をする楽しさを実感できるようにしている。 さらに、主体的な学修へと導いていけると考え実践している。			
4. 教育の成果			
授業評価は概ね良好な評価であった。 2 年次生は1 年からの振り返り記入の積み重ねから、言語化だけでなく書く力もついており、効果はあったと考える。 2年次生は臨地実習後、「次はもっと勉強して患者さんのために看護をしたい」という言葉を担当していた複数の学生から聞くことが出来、看護の楽しさを伝えることができたと考える。 すべての学生が「看護が楽しい」と思えるよう、支援していきたい			
5. 今後の目標			
短期目標 1) 授業研究を行う時間を確保し、学生の学びが深まる授業にする。 2) 学生とのコミュニケーションから、学生の変化に気づき、思いを知る。 長期目標 1) 広い視野をもって学ぶ。 2) 専門性を深める。 3) 主体的に行動できる学生を育てる。			
・ 必要に応じて根拠資料を添付（シラバス、授業評価アンケート等）			

学部・学科	保健医療学部 看護学科	氏名	溝口みちる
1. 教育の責任			
私は、看護学科 成人看護学領域に所属し、成人看護学の慢性期看護を担当した。また、大学での学習を進める上で必要となる基礎的な知識や技能、学ぶ姿勢を身につけるために、1年次ではラーニングスキルズを担当した。さらに、4年次は集大成となる統合看護学実習や卒業研究Ⅱを担当した。 令和5年度は、以下の担当を行った。 授業の担当： 1年次：ラーニングスキルズⅠ 2年次：成人看護学援助論Ⅱ 3年次：成人看護援助論演習、成人看護学実習Ⅱ 4年次：統合看護学実習、卒業研究Ⅱ 学生支援： アドバイザーは、1年次生から4年次生を担当し、学生生活を送るうえでの支援を行っている。また、広報委員としては、主にオープンキャンパスの学生ボランティアの担当を担っている。ここでは、学生が主体性を発揮し、学生自らの体験をもとに学生生活や本学で看護を学ぶ魅力を参加者に対して伝えることができるよう支援をしている。			
2. 教育の理念・目的			
看護職を志すものとしての人間性や倫理観を備えた医療従事者の育成を目指している。対象者をひとりの人として捉え、健康が障害されてもその人らしく生活を送ることができるよう常に相手の立場に立ち考えることができる力を養いたい。そのためには学生が自ら感じ、考え、行動することへつながるような、授業や実習方法を模索し、学生生活の期間で成長したことを実感できるよう教育していく。			
3. 教育の方法			
1. 学生との接し方 学生生活を送るうえで、さまざまな不安や悩みを抱えている学生が多い。学生の表情や言動から察知し、声をかけて話を聞くようにしている。些細なことでも真剣に向き合い共感し、学生自身で考え行動することができるよう助言する。迷った時には道筋を伝えることもあり、学生のレディネスに合わせて関わっている。 2. 授業の工夫 成人援助論演習（慢性期）では、紙上事例を電子カルテに見立て、日々変化する患者の状態をThink Pair Share & Think Group Share、グループワーク、ロールプレイング、シミュレーション、プレゼンテーションなどを取り入れた方法で学修に取り組んでいる。特に、Think Pair Shareは自分1人で考えた後、考えたことをペアで討議することで、学生全員が授業に参加できる。学生自身が、できているところや不足していることが何かを理解できることが利点である。その後、グループワークを行い、より広い範囲でさまざまな考え方を吸収し、意見交換や発表をすることでコミュニケーション力も養うことができる。 3. FD/SD活動 本学および看護学科のFD/SD研修会へは、積極的に参加している。 4. 自らの専門分野の成長 人工肛門を造設された方に関する研究に取り組んでいる。看護と情報を融合させることで、問題解決の幅が広がることがわかり、情報系の分野で国際学会発表も行った。他分野との共同研究での成果を成人看護学の授業へ取り入れることができるようにしたい。			
4. 教育の成果			
新型コロナウイルス感染症の影響も落ち着き、通常の授業を取り戻したことですべて対面授業ができた。 講義および演習では、ShareThink Pair Share & Think Group Share、グループワーク、ロールプレイング、シミュレーション、プレゼンテーションを取り入れることができた。学生からは「色々な意見が聞けて勉強になった、状況に応じた看護をすることが大切で、正解はないのだということがわかった」などの振り返りがあり、看護過程の理解と看護実践に繋がったという意見があった。			
5. 今後の目標			
短期的な目標： 成人看護援助論で学生の想像を引き立てる授業の工夫と、成人看護援助論演習でより臨場感ある授業を計画し、成人看護学実習では授業を活かした看護過程を実際に展開することができる。また、積極的な授業参加や実習が実施できるよう、学生ひとりひとりのレディネスを理解し関わる。 長期的な目標： 授業や実習を通しての体験や経験から、看護師を志すものとしての人間性や倫理観について深めることができる。			
・ 必要に応じて根拠資料を添付（シラバス、授業評価アンケート等）			
webシラバス参照			

学部・学科	保健医療学部看護学科	氏名	村川 園美
1. 教育の責任			
<担当授業科目> (1年次生) ラーニングスキルズⅠ (2年次生) 小児看護援助論 (3年次生) 小児看護援助論演習 小児看護学実習 (4年次生) 統合看護学実習 卒業研究 <各種学生支援> アドバイザーとして1年次生:4人、2年次生:2人、3年次生:2人、4年次生:2人を担当し、学習支援・就職支援・国家試験対策支援・相談業務・保護者面談等を行っている。			
2. 教育の理念・目的			
本学の教育理念である心身ともに豊かでたくましい実践力を持った人材を養成することを目指して教育に携わっている。看護師として必要な知識・技術だけではなく、自身の意見を言語化できるよう支援している。			
3. 教育の方法			
<学生との接し方> 学生の考えや思いは時間をかけて聞いている。学生が自身の考え等を話したい・伝えたいと思えるような雰囲気作りや言動を心掛けている。 <授業の工夫> 小児看護に関する授業では、学生が実際の現場をイメージできるよう臨床現場の写真や自身の経験談を取り入れて行っている。臨床現場で生じている実際の事例を取り入れ、その事例に対して看護師としてどのように関わると良いかということをグループごとで話し合ってもらおうといったアクティブラーニングを取り入れている。また、毎回の授業終了後に、その授業に関連する過去の看護師国家試験問題を提示し、国家試験への意識づけを行っている。授業ごとに学生に振り返りシートを記載させ、学生の様々な学びを確認している。 <FD/SD活動等にかかわる内外の研修への参加> 学内のFD研修会や新任研修「授業づくりワークショップ」研修に参加した。学外では、日本私立看護系大学協会主催の新任教員向け研修「大学教育とは」に参加した。 <自らの専門分野の成長> 小児看護領域に関する学会に参加し、最新の知見を得るようにしている。また、小児看護専門看護師として臨床現場で活動しており、臨床現場の実際を学生に伝えられるよう研鑽している。			
4. 教育の成果			
授業振り返りの一例 ・子どもの成長発達段階に合わせて説明する大切さはわかっていたが、実際にいざ考えてみると難しかった。 ・子どもは周囲の人(親や看護師)の影響を受けて、疼痛が増強したり軽減したりするため、関わり方に注意しなければならないと思った。 ・小児集中治療室がどのような場所か知らなかったが、写真を見てイメージすることができた。あのような環境に子どもが入院したら、親は不安が大きいだろうと思った。			
5. 今後の目標			
<短期目標> 実践力を持った人材教育のため、臨床現場を具体的にイメージでき、看護師としてとるべき行動を考えることができるような授業を行う。 <長期目標> 学生がより自主的に学習できるような教育方法を考え、実践する。			
・ 必要に応じて根拠資料を添付(シラバス、授業評価アンケート等)			
なし			

学部・学科	保健医療学部	氏名	森本早紀
1. 教育の責任			
・令和5年度担当授業科目 基礎看護学実習Ⅰ、基礎看護学実習Ⅱ 看護技術の基礎Ⅰ、看護技術の基礎Ⅱ ・アシスタントとして以下の基礎看護学領域の授業科目も担当した 看護学概論Ⅰ、看護学概論Ⅱ コミュニケーション論 看護実践プロセスの基盤Ⅱ、看護実践プロセスの基盤Ⅰ			
2. 教育の理念・目的			
本学のディプロマポリシーに則り、以下の3点を目的とする。 ・医療の対象となる人の多様性を受け入れる ・科学的思考力に基づいた思考を備え、実践につなげる ・主体的な学習のもとに、自律的な行動をとる			
3. 教育の方法			
上述した教育の目的を達成するために、私は学生には対象となる人々を理解し自分で考える力をつけられるような関わりを意識している。学生が自分の考えを自らの言葉でつづることを促し、学生自身が自律した思考と行動を培えるよう心がけている。また、学生と共に考える姿勢を持ち、教員からの一方向な教育ではなく、学生と教員の双方向での意見交換やディスカッションが行える関わりを行っている。実習では、臨床現場から学生自身が感じ、考えたことを言語化し他者と共有できるように働きかけている。「なぜそう思ったのか」、その考えに至るまでの経緯などを丁寧に質問しながら思考を整理できるように努めている。また、臨床現場の看護師としての経験を用いた説明や言葉がけを行うことで、大学での学びと臨床現場の実践との接合を目指している。			
4. 教育の成果			
授業後に学生から提出された学びの振り返りでは、授業の学習目標の達成に至る学びが認められる。授業中のグループワークでは、積極的な質問や意見交換が行われている。 実習では、初日から最終日までの間に、学生の思考や実践の成長を実感している。臨床現場での経験を通じて、座学での学びを深めることができている。			
5. 今後の目標			
<短期目標> 学生の視点に立ち、自主性を尊重した学習支援できるような指導を行う。 <長期目標> 医療や看護について多様な考え方を培えるような関わりができるようになる。			
・必要に応じて根拠資料を添付（シラバス、授業評価アンケート等）			